佐久市埋蔵文化財調査報告書　第161集

西近津遺跡群

西近津遺跡Ⅵ

長野県佐久市長土呂西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ発掘調査報告書

２００９，３
山　崎　計一郎
佐久市教育委員会

例　言

1．本書は、山崎計一郎が行う長屋建住宅建設工事に伴う西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵの発掘調査報告書である。
2．調査原因者　　山崎　計一郎
3．調査主体者　　佐久市教育委員会
4．遺跡名及び所在地　　西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ（ＮＴⅥ）
　　長野県佐久市長土呂字森下1803－3
5．調査期間及び面積　　試掘調査　平成20年12月10・11日
　　調査期間　平成20年４月22日～平成20年６月６日
　　整理期間　平成20年６月９日～平成21年３月27日
　　調査面積　285㎡（開発面積634㎡）
6．調査担当者　林　幸彦　佐々木宗昭
7．本書の編集・執筆は、写真図版を佐々木が他を林が行った。
8．本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1．遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)・ピット(P)である。
2．挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
　住居址１／80　土坑１／60　　土器１／４　鉄器１／３
3．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
4．土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色調』に基づいた。
5．調査区グリットの、間隔は４×４ｍに設定した。
6．スクリーントーンの表示は以下のとおりである。

地山断面　柱痕　焼土範囲　床下埋め土
炭と焼土分布範囲　須恵器断面　黒色処理　敲打痕
石磨り面

目　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
1．立地と経過 …… 1
2．調査体制 …… 2
3．基本層序 …… 2
4．検出遺構と遺物の概要 …… 2
5．遺跡の周辺遺跡 …… 3
第Ⅱ章　遺構と遺物
1．竪穴住居址 …… 4
2．掘立柱建物址 …… 21
3．土　坑 …… 21
4．溝状遺構 …… 22
5．ピット群 …… 22
6．まとめ …… 22
抄　録

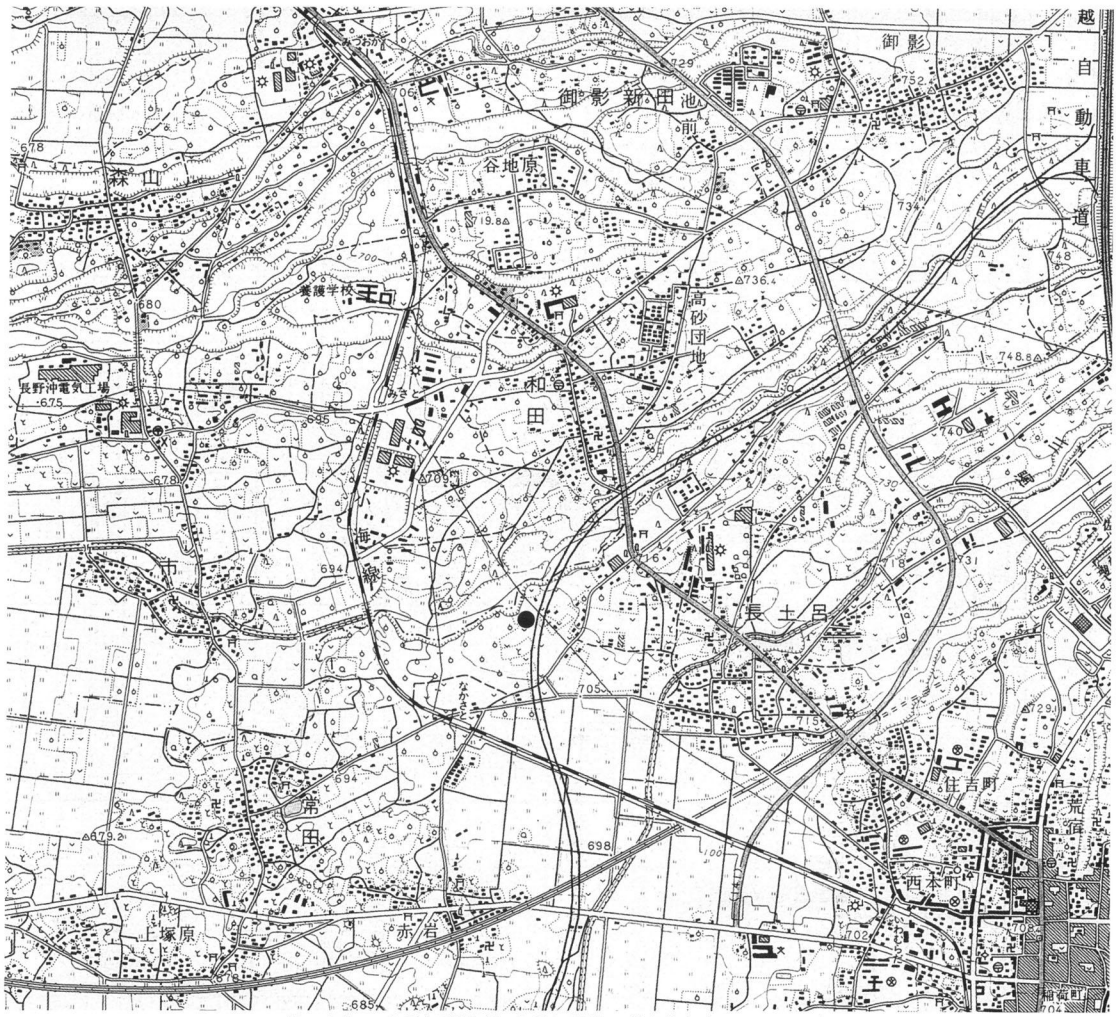
第１図　西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ調査全体図（１：200）

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1．立地と経過

西近津遺跡群は、佐久・小諸両市境を南西に流下する湧玉川左岸の田切り台地上に立地し、標高は700～713ｍを測る。台地の南側は、浅い低地で周防畑遺跡群と画されている。近津神社西からＪＲ小海線に至る大きな遺跡群で、縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世の遺構や遺物が多く知られている。鷺林城跡が西端にある。今回の調査地点に近接した中部横断自動車道予定地で長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が継続中である。200軒を超える弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代等の竪穴住居址をはじめ、国内最大級の弥生時代後期の住居址や古代銅印「鋅子私印」が発見され注目を集めている。付近の市道改良工事に先立つ発掘調査では、約100軒の竪穴住居址（弥生後期～平安時代）等が検出されている。

今回、山崎計一郎が長屋建住宅建設工事を行うことになり、佐久市教育委員会が試掘調査を行った。結果、遺構が発見されたため保護協議を行い、駐車場予定地を除く建物基礎部分と擁壁部分に対して記録保存目的の発掘調査を行う事となった。



第２図　西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ位置図（１：25,000）

２．調査体制

調査主体者　佐久市教育委員会　教育長　木内　清

事　務　局　社会教育部長　内藤孝徳　　社会教育部次長　柳沢本樹
　　文化財課長　森角吉晴　　文化財調査係長　三石宗一
　　文化財調査係　林　幸彦　並木節子　須藤隆司　小林真寿　羽毛田卓也　神津　格
　　冨沢一明　上原　学　出澤　力

調査体制

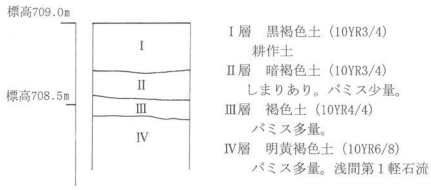
調査担当者　林　幸彦　佐々木宗昭

調　査　員　磯貝律子　堺　益子　澤井知春　清水澄生　清水律子　日向昭次　中山清美
　　小林よしみ　赤羽根充江　岡村千代美　大工原達江　田中ひさ子　広瀬梨恵子
　　山元有美子　橋詰勝子　橋詰信子　堀籠保子

３．基本層序

遺跡調査地点は、南西に流下する湧玉川に浅間第一軽石流の堆積物が浸食され形成された田切り台地上にある。

遺構は地表下30～40cmの第Ⅲ層褐色土の上面で確認された。第Ⅱ層中には、小円礫や砂のブロックが見られ小河川の流れが度々あったと思われる。

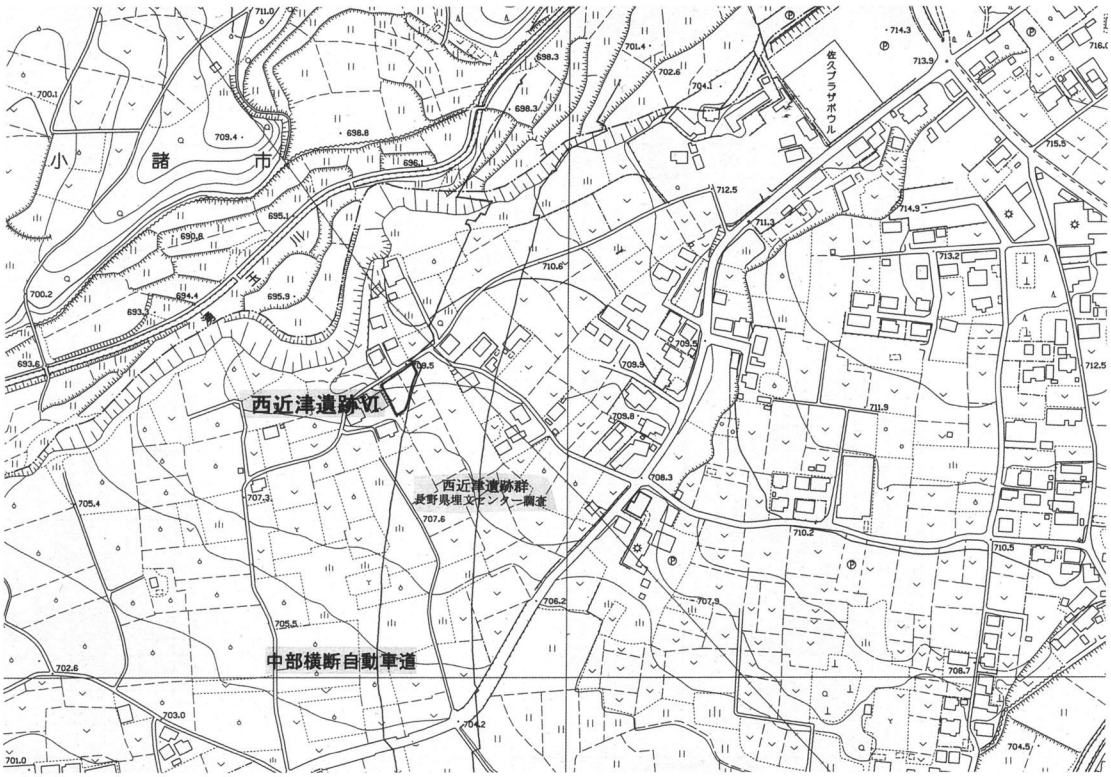


第３図　西近津遺跡Ⅵ標準土層模式図

４．検出遺構と遺物の概要

遺構　竪穴住居址９軒（古墳時代後期６軒、平安時代３軒）、
　　掘立柱建物址２棟、土坑４基、溝状遺構４条、ピット25基

遺物　縄文土器、弥生後期土器、土師器、須恵器、白磁、銅製品、鉄製品、石製品



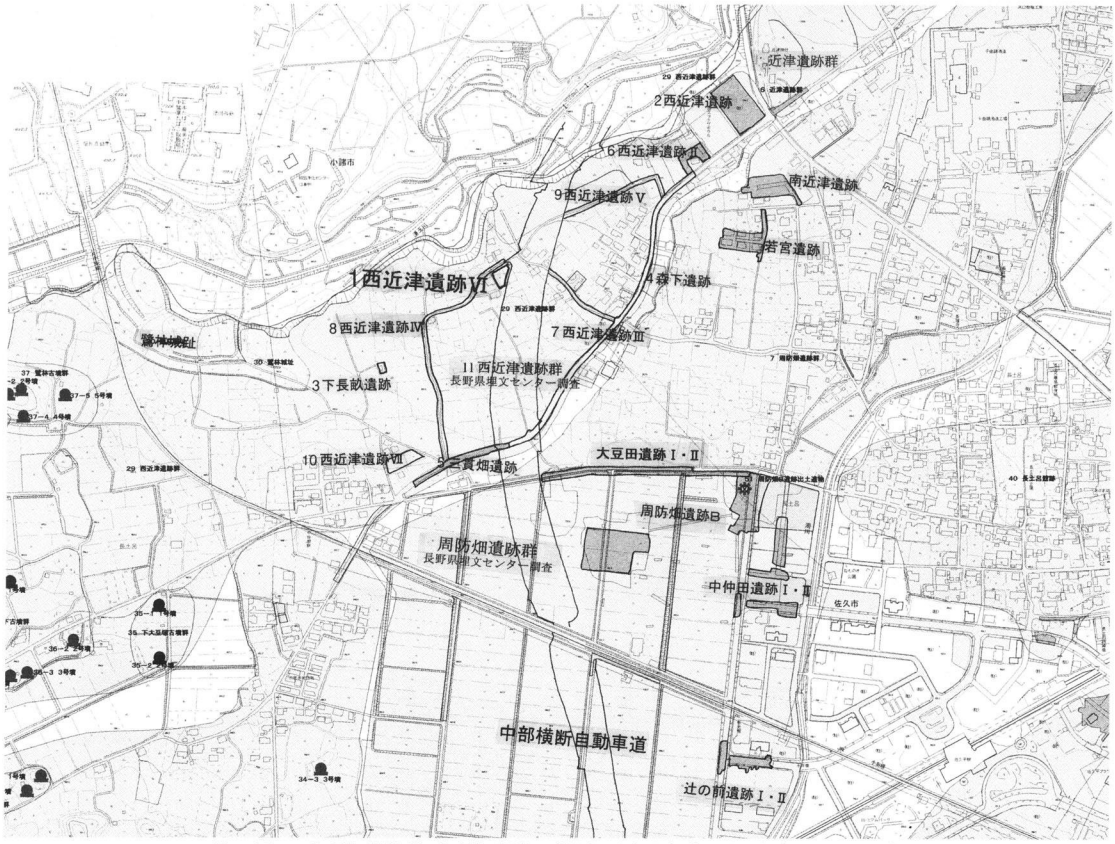
第４図　西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ調査範囲図（１：5,000）

5．遺跡の周辺遺跡

西近津遺跡群やその周辺の遺跡内では、圃場整備、長野新幹線、佐久平駅周辺の区画整理事業、道路改良、中部横断自動車道等の大規模な開発が続いている。

西近津遺跡群内では、昭和46年度の西近津遺跡の調査から11地点（第９表）で発掘調査が行われている。田切の台地上長さ１㎞幅0.3㎞の範囲で、弥生時代後期・古墳時代・奈良時代・平安時代の竪穴住居址等が発見されている。特に本調査地点東隣の長野県埋蔵文化財センターにより進められている西近津遺跡群では、古代銅印「鋅子私印」をはじめ床面積46坪の巨大な弥生時代後期の竪穴住居址や弥生時代後期～平安時代の300棟を超す竪穴住居址等が検出されている。また、県調査範囲で東西にのびる弥生の大溝があるが、西側100ｍの西近津Ⅳまでのびることが確認された。下長畝遺跡では多くの縄文時代中期・後期の土器が出土しているが、西近津遺跡Ⅳで中期の土坑が検出されただけで、該期中心は鷺林城に寄るのであろう。

北方の鋳物師屋遺跡群では馬の埋葬墓や古墳～平安時代の集落址、芝宮・中原・長土呂遺跡群では2,000棟前後の竪穴住居址を含む古墳～平安時代の集落址、南方の濁り遺跡では古代の水田址、西一里塚遺跡では弥生時代後期の環濠集落や墓域が、一本柳遺跡群や北西の久保遺跡では多量の埴輪・馬具を伴う古墳群と弥生時代中期～後期・古墳時代～中世におよぶ集落址等枚挙に遑がないほどの遺構と遺物が発掘調査されている。南東に隣接する周防畑遺跡群内でも、弥生時代後期～平安時代の集落址と墓域が調査されている。また、最近の調査で佐久地方では、検出例の少ない弥生時代末から古墳時代初頭の小規模な集落も岩村田松の木遺跡・塚原藤塚遺跡・長土呂北近津遺跡群などの古東山道道筋に推定される地域から発見されている。



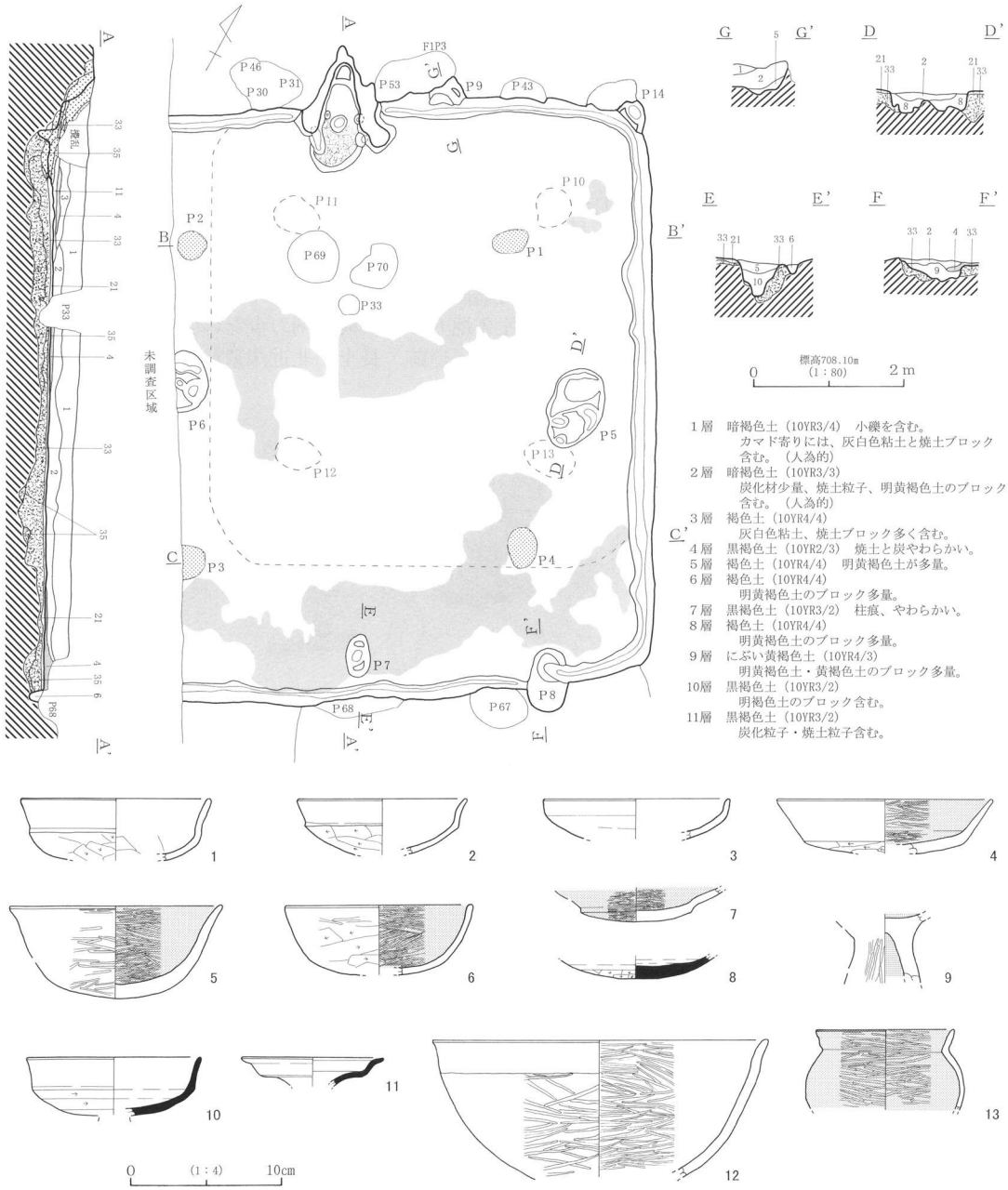
第５図　西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ位置・周辺遺跡分布図（１：10,000）

第Ⅱ章　遺構と遺物

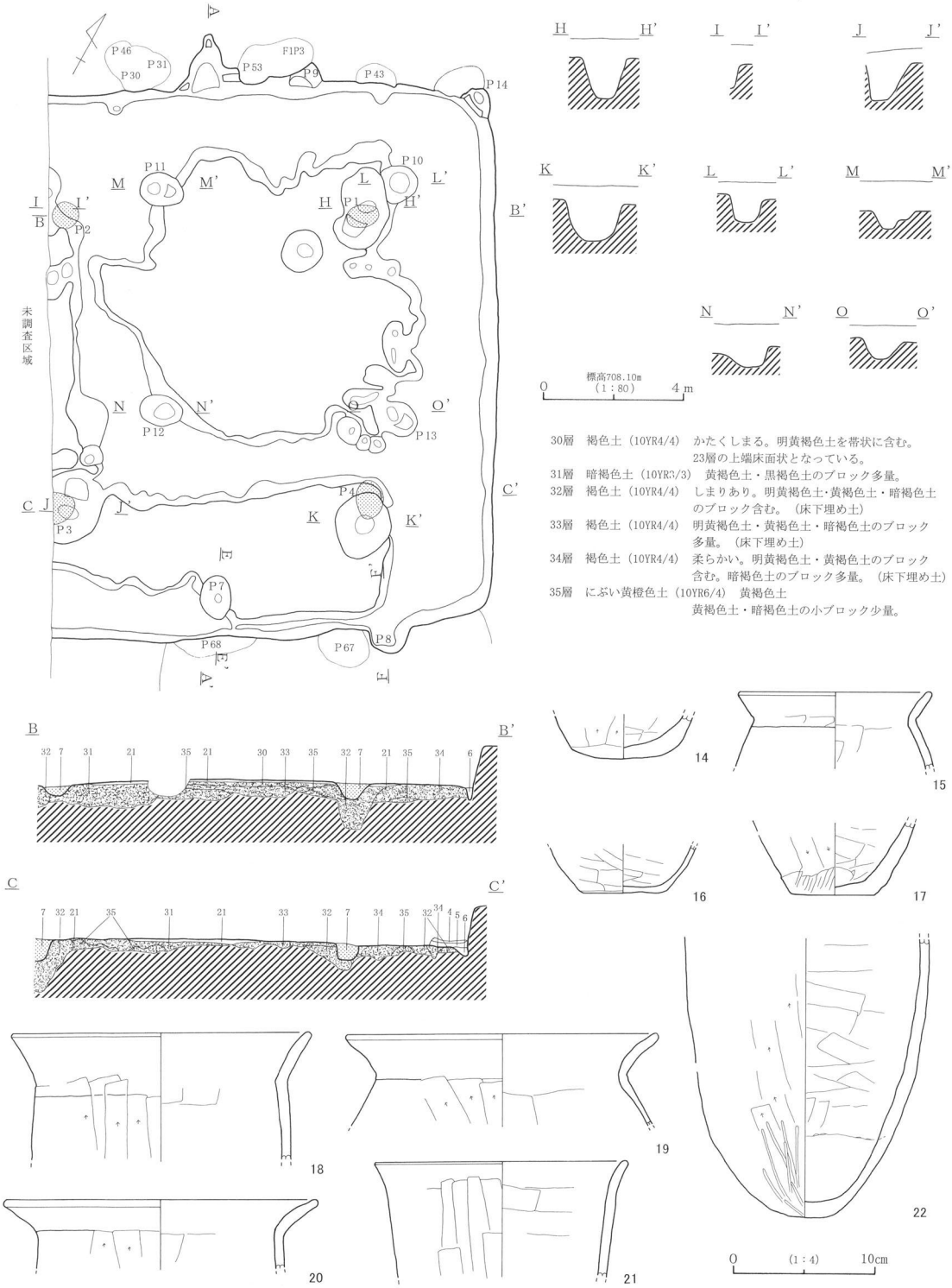
1．竪穴住居址

（1）Ｈ１号住居址

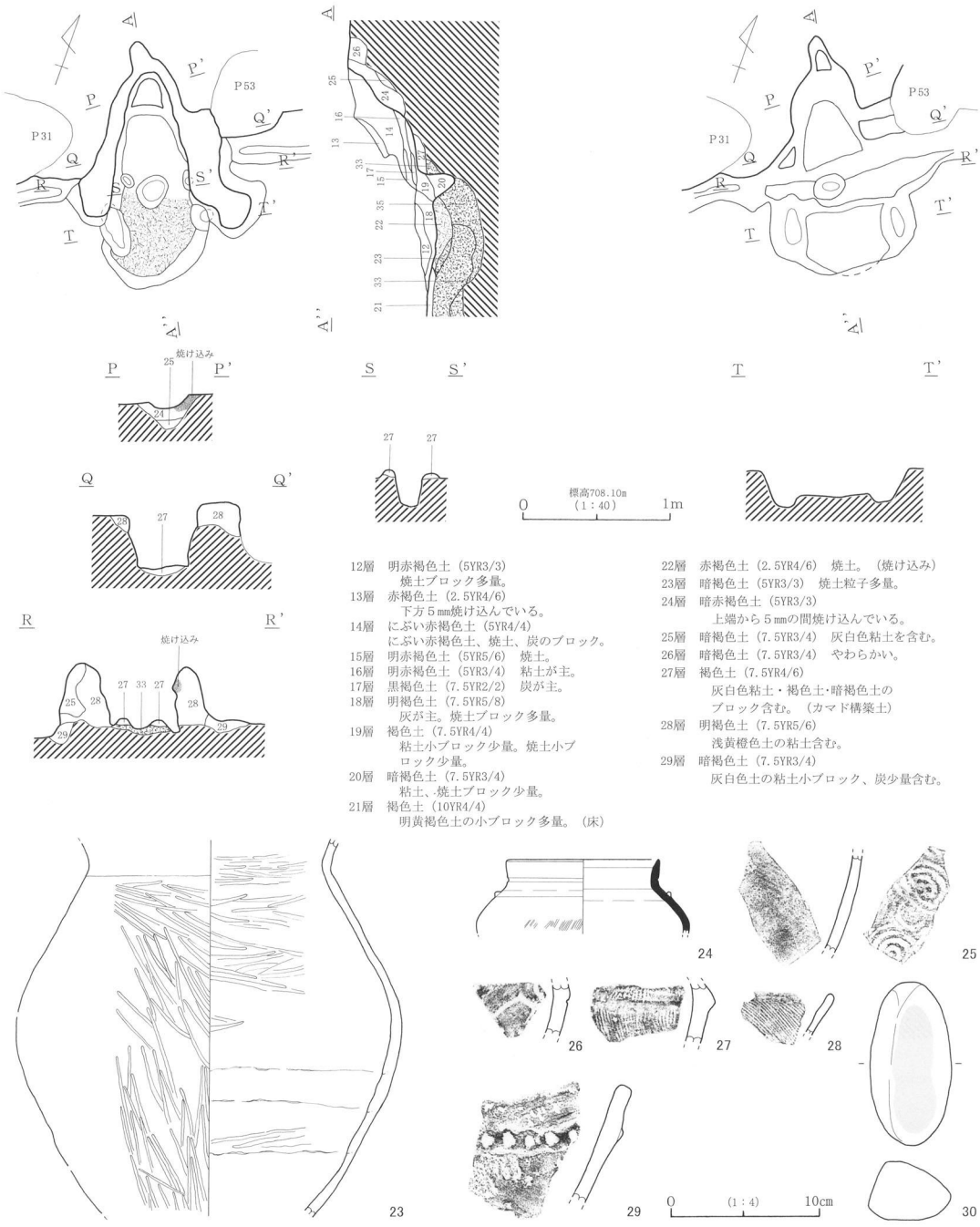
本址はお・か・き－５～７Ｇｒに位置し、Ｈ２・Ｆ１・Ｐ30～Ｐ33・Ｐ68～Ｐ70・Ｐ43に切られ、



第６図　Ｈ１号住居址及び出土遺物実測図

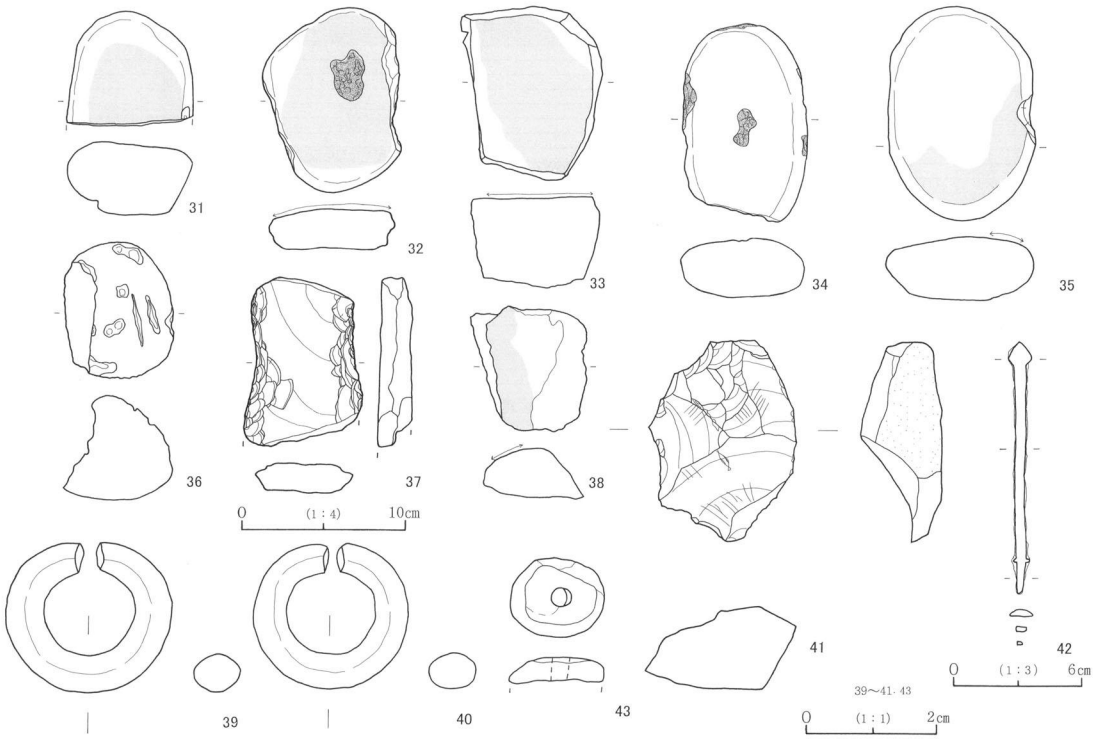


第７図　Ｈ１号住居址及び出土遺物実測図



第８図　Ｈ１号住居址カマド及び出土遺物実測図

Ｍ２号溝状遺構より新しい。平面規模は北壁検出部6.0ｍ、東壁7.2ｍ、南壁検出部6.0ｍを測る。平面形態は隅丸の方形になろう。壁残高は最深58cmを測り、カマドを中心とする主軸方位はＮ－28°－Ｗを示す。覆土１・２層は人為埋土とみられる。主柱穴Ｐ１～Ｐ４が南北4.0ｍ東西4.0ｍの方形に配



第９図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図

置されている。柱痕はＰ１は径40cmＰ３は径50cmの円形、Ｐ２は長径40cm短径30cmＰ４は長径50短径40cmの楕円形で、深さはＰ１が90cmＰ２が70cmＰ３が80cmＰ４が75cmを測る。床面下から検出されたＰ10～Ｐ13は南北3.2ｍ東西3.2ｍの方形に配置されて、桁行・梁行とも本址の北壁や東壁と平行している。旧主柱穴Ｐ10～Ｐ13を主柱穴Ｐ１～Ｐ４に替え北東コーナーを基点に住居の拡張がなされたとみられる。東西壁下に対峙する楕円形のＰ５・Ｐ６の底面は凹凸が激しい。Ｐ７は南壁中央直下にあり柱痕状の堆積が見られる。北壁に壁柱穴Ｐ８・Ｐ14が南壁にＰ９が掘られている。床面下の掘方は旧主柱穴Ｐ10～Ｐ13がつくる方形内が浅く、その範囲から想定される旧壁までが深く掘られている。旧カマドの存否は定かでないが、カマドは北壁の中央に設置されていた。両袖と煙道の一部が残る。袖部には石芯が窺える小ピットがある。灰白色・浅黄橙色粘土・暗褐色土で構築されている。床面は全体に堅く敲き締められていた。周溝は、カマド部を除き壁下を巡る。床面中央から南壁にかけて焼土と炭が多量に見られた。

出土遺物には、須恵器、土師器、縄文土器、弥生土器、鉄器、銅製品、鉱滓、石器、石製品、炭化種子がある。カマド東側の覆土中とカマド中から多く出土した。カマド内から獣の焼骨出土。

10は須恵器高坏蓋とも考えられるが欠損部基部周辺の調整が粗く、無蓋高坏とした。坏部体部と口縁部の境に稜を有する。カマド出土片とⅢ区床面出土片が接合した。11は小型の須恵器で、細い頸部からラッパ状に外反し、頸部端で段をなして外反する。口縁端部は僅かに内弯気味である。Ⅱ区床面から出土した。24は須恵器短頸壺で頸部に別個体の口縁先端部が融着している。Ⅱ区の床面下から出土した。８は手持ちヘラケズリされる須恵器坏で混入遺物である。１～７は土師器坏で、４～７が内面黒色処理される。１・２は須恵器蓋坏模倣タイプの坏で体部と口縁部の境に段を有する。４・７は浅い半球状の底部から口縁部が外傾し４は体部と口縁部の境に稜を有し、７は段を有する。５・６は半球状の底部で５は底部厚く口縁部が短く緩く外反し、６は素縁口縁である。３は浅い半球状の底部

第１表　Ｈ１号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	坏	(12.6)	(12.4)	<4.1>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区周溝
2	土師器	坏	(11.2)	(10.2)	<3.7>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区、カマド
3	土師器	坏	(12.4)	(12.0)	<2.6>	ナデ	ナデ	回転実測	Ⅳ区
4	土師器	坏	(14.4)	(10.8)	<3.6>	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区
5	土師器	坏	14.1	－	6.10	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区、Ⅳ区床
6	土師器	坏	(12.4)	－	<4.6>	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラケズリ→ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区、Ⅳ区床
7	土師器	坏	－	7.3	<2.1>	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区
8	須恵器	坏	－	－	<1.5>	ロクロナデ	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区
9	土師器	高坏	－	－	<4.5>	坏部ヘラミガキ、黒色処理、脚部ナデ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区
10	須恵器	高坏	(11.6)	－	<3.8>	ロクロナデ	ロクロナデ、坏部回転ヘラケズリ	回転実測	カマド、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区
11	須恵器	はそう	(9.4)	－	<1.9>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅰ区、Ⅱ区床
12	土師器	鉢	22.1	－	<9.1>	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅳ区、Ｐ６
13	土師器	鉢	(9.2)	－	<5.3>	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	回転実測	Ⅰ区
14	土師器	甕	－	7.3	<3.1>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ区、カマド左ソデ
15	土師器	甕	(13.8)	－	<5.5>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区床直
16	土師器	甕	－	(6.4)	<3.4>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区
17	土師器	甕	－	6.2	<5.2>	ヘラナデ	ヘラケズリ→ハケ目	完全実測	Ⅰ区２層
18	土師器	甕	(22.4)	－	<4.9>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	カマド、Ⅱ区床
19	土師器	甕	(22.2)	－	<6.6>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区、Ⅳ区
20	土師器	甕	(22.4)	－	<4.9>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	カマド、Ⅱ区床
21	土師器	甕	(18.0)	－	<8.2>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区、カマド
22	土師器	甕	－	－	<9.8>	ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	カマド、Ⅰ区
23	土師器	壺	－	－	<25.3>	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	カマド、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区
24	須恵器	短頸壺	(10.4)	－	<5.0>	ロクロナデ	ロクロナデ、タタキ、突帯貼付	回転実測	Ⅱ区ホリ方

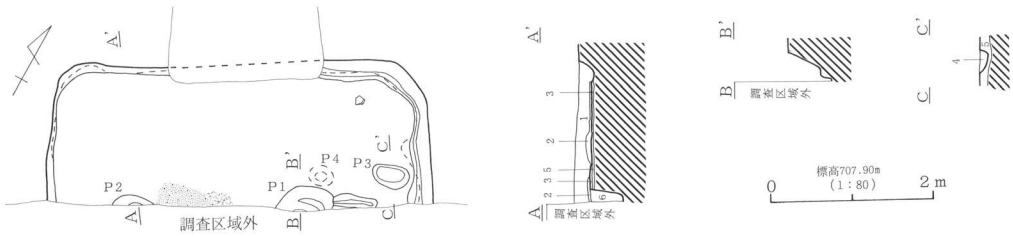
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
30	磨石	輝石安山岩		11.00	5.60	4.00	304.20	正面にすり面	Ⅳ区
31	磨石	輝石安山岩		(7.00)	(7.80)	4.60	391.80	正面にすり面	Ⅳ区
32	磨石・敲石	安山岩		11.30	8.55	2.50	365.60	正面にすり面、正面・左右側面に敲打痕	Ⅰ区
33	磨石	輝石安山岩		10.65	8.75	5.90	789.50	正面にすり面	床
34	磨石・敲石	輝石安山岩		(12.20)	7.70	3.60	(484.00)	正面・上端部・左右側面に敲打痕、下部欠損	Ⅳ区
35	磨・敲石	角閃石		13.10	9.10	3.90	582.70	正面にすり面、右側面に敲打痕	Ⅰ区
36	石製品	軽石		8.40	6.80	6.40	134.30	条痕あり	Ⅳ区
37	打斧	輝石安山岩		(10.35)	7.20	2.10	228.90		フクナ
38	磨石	輝石安山岩		8.40	6.80	6.40	134.30	条痕あり	Ⅳ区
39	耳鐶	銅		2.30	2.60	0.70	14.70		Ⅲ区
40	耳鐶	銅		2.20	2.35	0.70	12.10		Ⅲ区
41	石核	黒曜石		3.10	2.30	1.25	7.40		Ⅲ区
42	鉄鏃	鉄		11.50	1.10	0.30			Ⅳ区

で口縁部短く直立気味に立ち上がる。12は土師器鉢で内外面ヘラミガキが施される。13の土師器壺は、内外面ヘラミガキが施され、内外面黒色処理される。14～22は土師器長胴甕で、18・20は最大径が口縁部に、15・19は体部にある。23は外面ヘラケズリ後ヘラミガキされ、内面も一部ヘラミガキの土師器壺である。26・27・29の縄文後期土器、28の弥生後期土器は混入遺物である。41は長頸棘篦被直角関片丸造三角系式の鉄鏃で、現存長11.5㎝。Ⅳ区の床面下から出土した。銅芯金張りの耳鐶が２点、39はⅢ区覆土２層から40は同１層から出土した。30～33・35・38は磨石で32・35には敲打痕もみえる。34は敲石、36は軽石で鋭利な傷がある。43の臼玉はカマドから、鉱滓２点はＰ12南脇の床面直上から炭化種子（クルミ）はＰ４脇の床面直上から出土した。

本址はこれらの出土遺物より６世紀後半に位置づけられる。

（２）Ｈ２号住居址

本址は、え・お・か－７Ｇｒに位置し、Ｈ１・Ｐ67・68より新しい。平面規模は北壁4.3ｍ、東壁検出部1.6ｍ、西壁検出部1.6ｍを測る。平面形態は隅丸の方形になろう。壁残高は最深30㎝を測り、軸方位はＮ－25°－Ｗを示す。覆土１・２層は人為埋土とみられ、２層は地山黄褐色土の小ブロック



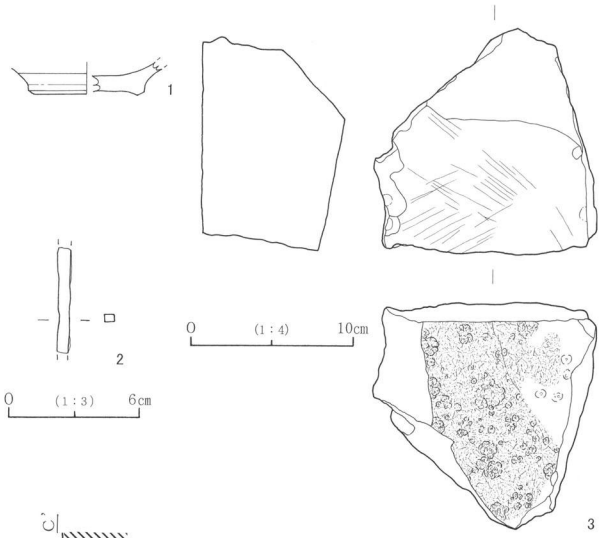
1層　暗褐色土（10YR3/3）　柔かい。
2層　暗褐色土（10YR3/4）　黄褐色土の小ブロックが主。
3層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
4層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　黄褐色土のブロックを多量に含む。
5層　褐色土（10YR4/4）
6層　黒褐色土（10YR3/2）
7層　褐色土（10YR4/4）　にぶい黄橙の小ブロックを多量に含む。

第10図　Ｈ２号住居址実測図

第２表　Ｈ２号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様					備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面				外面		
1	白磁	碗	－	(7.0)	<2.0>	ロクロナデ→施釉				ロクロナデ→高台削出し→施釉	回転実測	Ⅰ区
No.	器種		素材		残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見		出土位置
2	角釘		鉄製品			－	<4.9>	0.70	0.35			Ⅰ区・１層
3	磨・台石		輝石安山岩			13.9	13.80	8.80	2215.00	アクが付着している		Ⅰ区

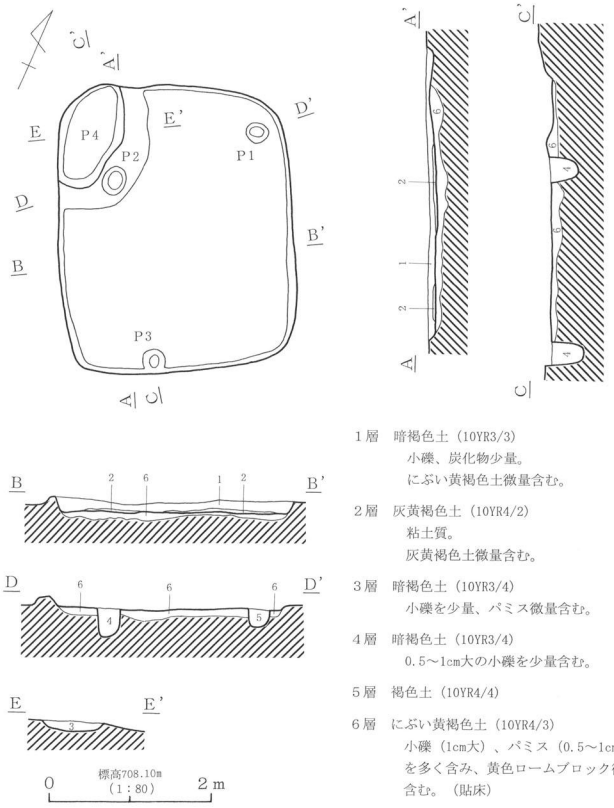
が主である。主柱穴Ｐ１・Ｐ２が北壁に平行に配置されている。Ｐ１は長径70cm深さ57cm、Ｐ２は深さ37cmを測る。Ｐ１から東に延びる深さ９cm断面Ｕ字形の溝が検出された。間仕切り溝であろうか。床は平坦で部分的に固く敲き締められているが総じて軟弱である。深さ２～８cmの周溝が、東壁と北壁の一部壁下にみられた。Ｐ２の東床面上に焼土と炭化材の堆積が見られた。北壁の中央に試掘トレンチが及んでいるため壁等が失われている。遺物は図示したもの以外は須恵器・土師器の小片であった。１は白磁碗の底部である。２は両端が欠ける鉄製品、３は台石で表面に擦痕があり、磨られたものであろうか。本址は少ない出土遺物で時期は明確でないが、11世紀代に位置づけられようか。

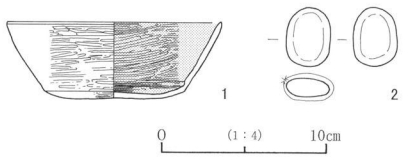


第11図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図

（３）Ｈ３号住居址

本址は、う・え－５・６Ｇｒに位置し、Ｍ２・Ｈ５を切る。規模は北壁は2.4m、東壁3.0m、南壁2.5m、西壁3.3mを測り隅丸長方形を呈す。壁残高は最深12cmを測り、長軸方位はＮ－25°－Ｅを示す。ピットは４個検出された。Ｐ１～Ｐ３は柱穴とみられＰ１は長径30cm短径24cm深さ23cm、Ｐ２は36cm短径28cm深さ35cm、Ｐ３は径30cm深さ39cmを測る。北東コーナーのＰ４縁は床面より５～10cm程高くなっていた。長径140cm短径80cm深さ10cm。床は軟弱で平坦でない。カマド等は検出されない。遺物





第12図　Ｈ３号住居址及び出土遺物実測図

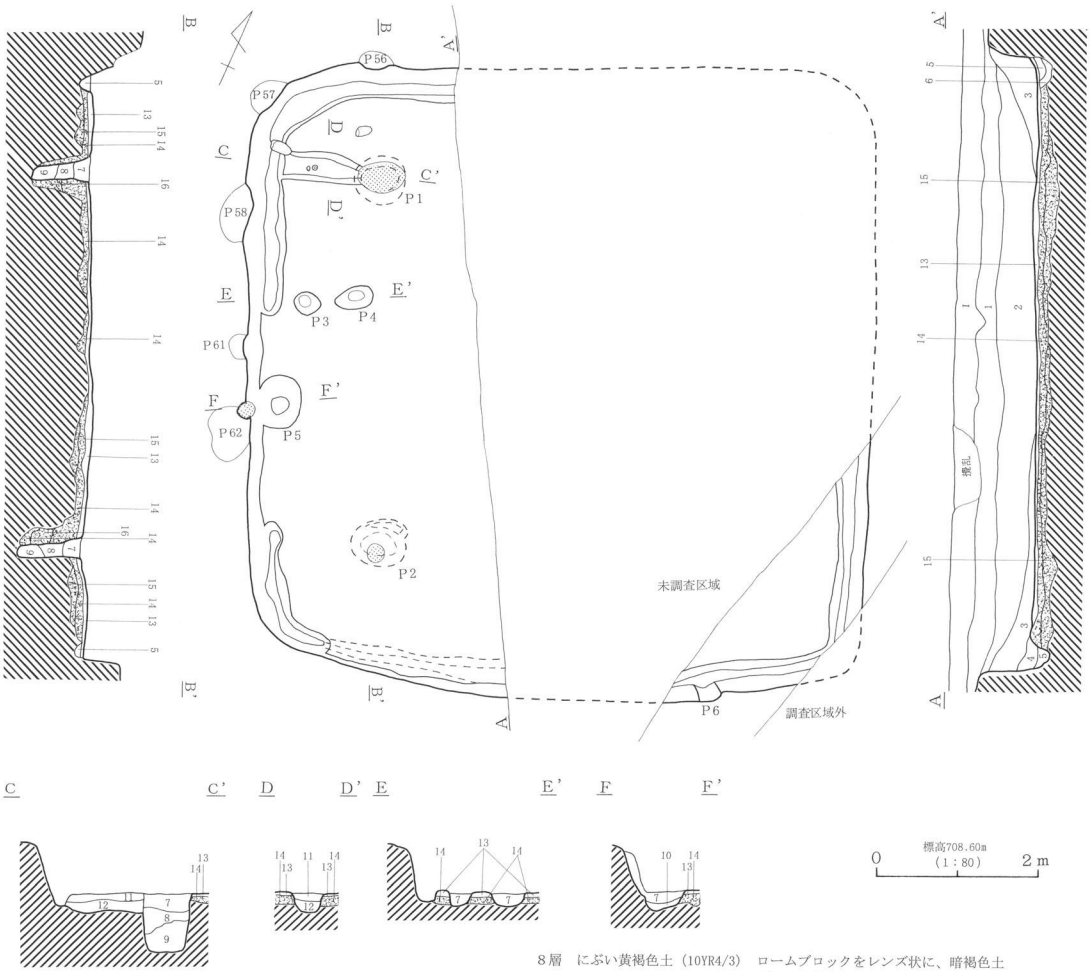
は土師器坏と磨石が図示できた。１の土師器坏は浅い平底気味の底部から口縁部が外傾し内面黒色処理される。２は小型の磨石である。

本址は少ない出土遺物で時期は明確でないが、Ｈ５号住居址よりは新しい。

（４）Ｈ４号住居址

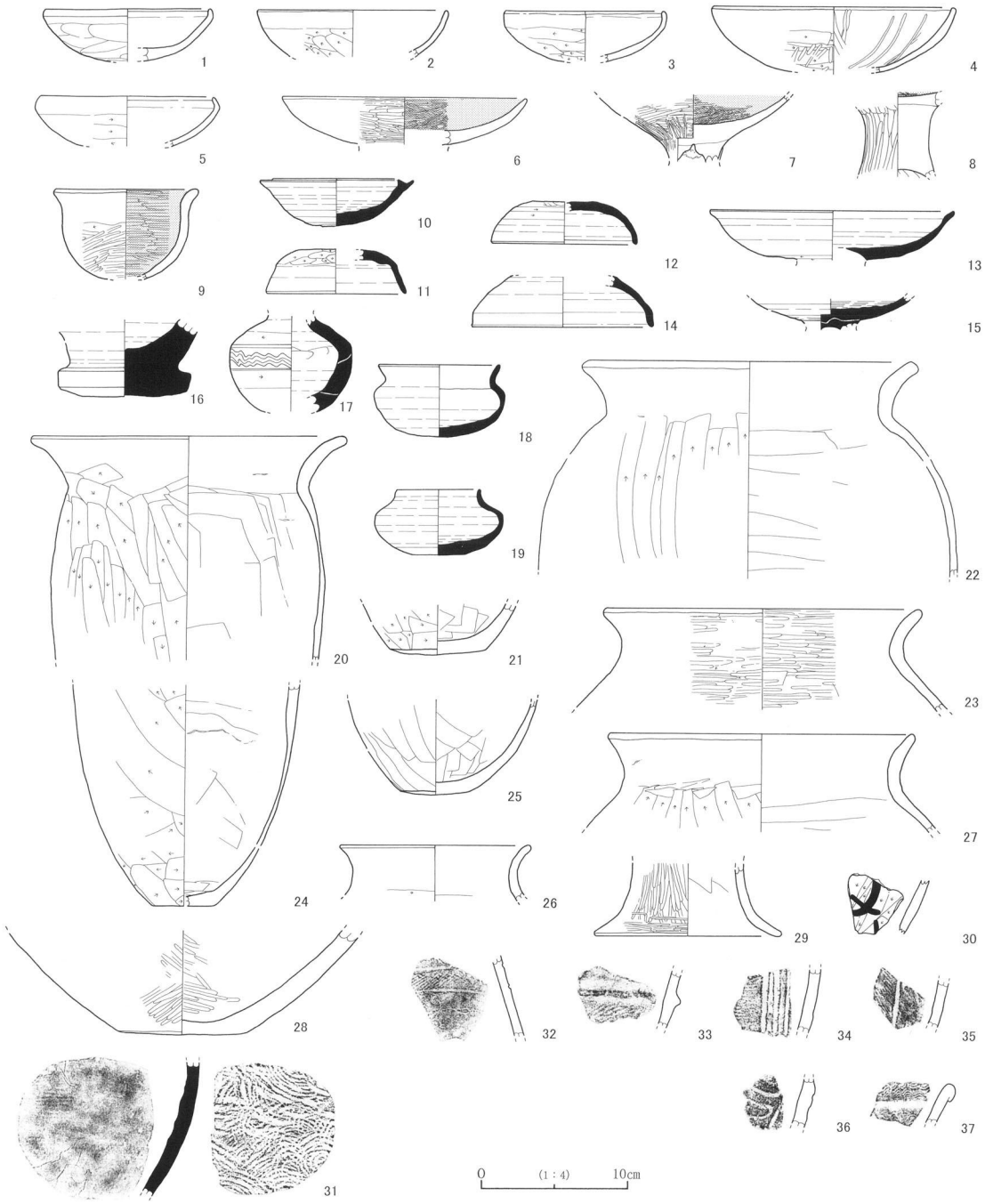
本址は、あ～えー４・５～７Ｇｒに位置し、Ｐ56～Ｐ58・Ｐ61・Ｐ62に切られ、Ｈ５・Ｍ２を切っている。平面規模は北壁検出部2.4ｍ（推定７ｍ）、東壁検出部2.1ｍ（推定6.8ｍ）南壁検出部6.4ｍ（推定6.8ｍ）、西壁6.8ｍを測る。平面形態は隅丸方形を呈す。壁残高は最深65㎝を測り、軸方位はＮ－25°－Ｗを測る。覆土は３層に分層され、２層は人為埋め土である。

主柱穴Ｐ１・Ｐ２は西壁と平行に配置し、深さＰ１は70㎝Ｐ２は90㎝。柱痕はＰ１が60㎝×40㎝の楕円形、Ｐ２は径25㎝の円形。西壁中央と南壁に壁柱穴Ｐ５・Ｐ６がある。Ｐ１から西に延びる深さ



1層　暗褐色土（10YR3/4）　パミス・ローム粒子微量。少礫少量。
2層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒子をレンズ状にロームブロック斑状に炭化物を含む。
3層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　小礫・ロームブロックを少量含む。
4層　褐灰色土（10YR4/1）　ローム粒子微量。
5層　暗褐色土（10YR3/3）　パミス微量。
6層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　黒褐色土のブロック少量含む。
7層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子・パミス少量含む。
8層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ロームブロックをレンズ状に、暗褐色土ブロックを含む。
9層　明黄褐色土（10YR6/6）　ローム主体。非常にやわらかい。
10層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス少量含む。
11層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・パミス少量含む。
12層　灰黄褐色土（10YR4/2）　黒褐色土・ロームを少量含む。
13層　暗褐色土（10YR3/3）　ロームブロックがレンズ状に含まれる。（床面）
14層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　暗褐色土を多量に含む。
15層　明黄褐色土（10YR6/6）　暗褐色土ブロック少量。
16層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　ロームブロック・暗褐色土を含み、やわらかい。

第13図　Ｈ４号住居址実測図

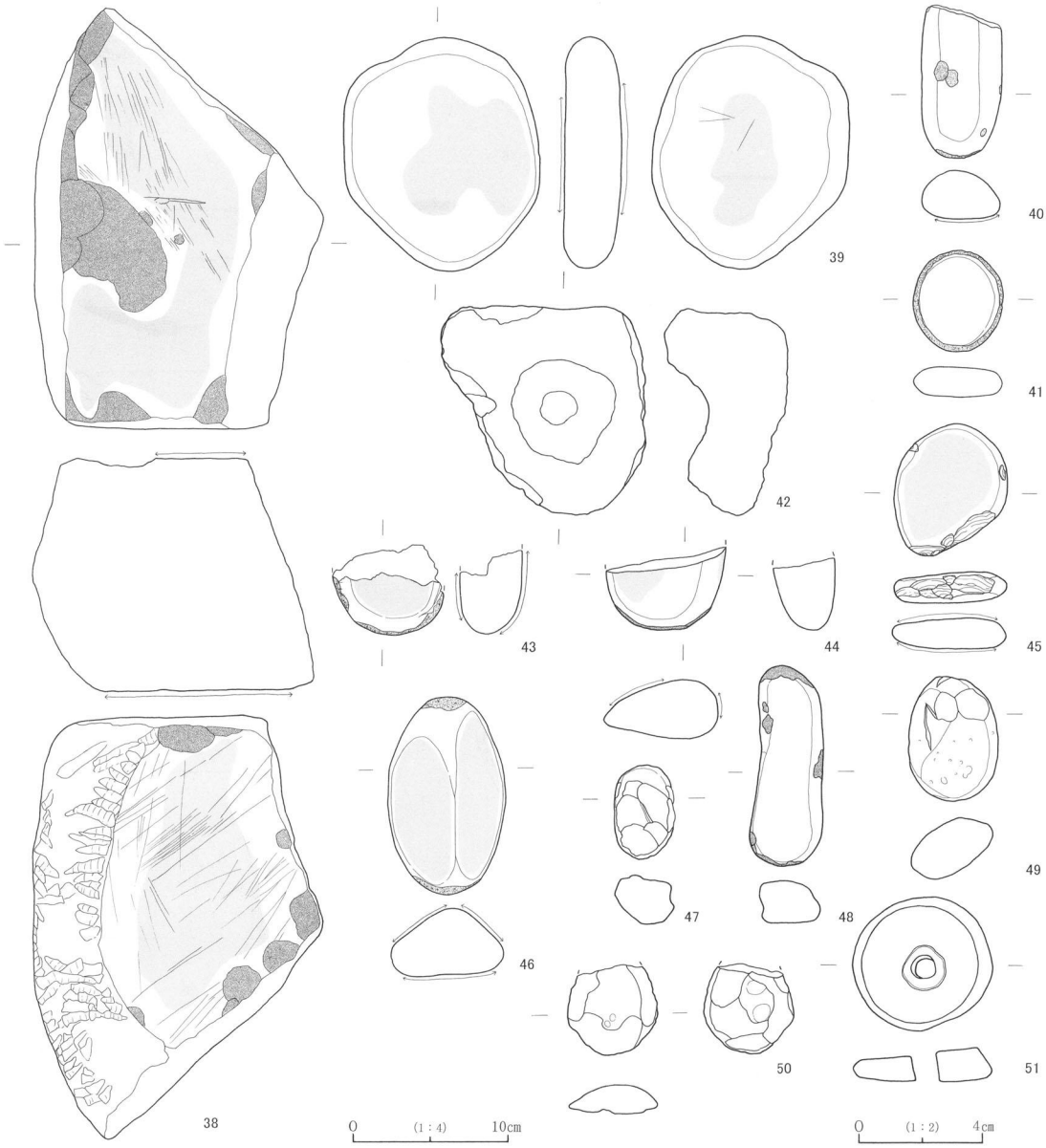


第14図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

26cm断面Ｕ字形の間仕切り溝が検出された。この溝に平行に対峙するＰ３・Ｐ４も関連あろうか。深さ８～26cmの周溝が、Ｐ５周辺を除き壁下を巡る。床面は全体に堅く敲き締められていた。

出土遺物には、須恵器、土師器、縄文土器、弥生土器、鉄器、鉄製品、石器、石製品、獣骨がある。

10は須恵器坏身で、口径10.6cmと小さい。口縁端部のたちあがりは短く内傾し、受部端部とほぼ同



第15図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

一の位置となり、ほとんど形骸化している。丸みを持った底部は、回転ヘラケズリ調整である。Ⅲ区Ｐ２北の床面直上から出土した。11・12・14は須恵器坏蓋で坏身と同様小型で11・12の口径は10㎝以下である。11・12の天井部は低く平になり、11は手持ちヘラケズリ12はヘラナデされる。14の口縁部は垂直に下がる。13・15は須恵器高坏で、無蓋高坏の13は坏部浅く内弯気味に立ち上がり口縁部短く外反する。16は分厚い底部の須恵器擂鉢、底部内面に擂り痕がみえる。Ｐ１から出土。17は櫛描波状文が施される須恵器瑞。18・19は須恵器小型壺で間仕切り溝内から出土。18の底部は回転ヘラ切り後ナデ調整、19は体部下部回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り後ナデ調整される。１～６は土師器坏、半球状で口縁部が素直に開くもの２・４、口縁部が内弯するもの１・３・５がある。６～８は坏部内面

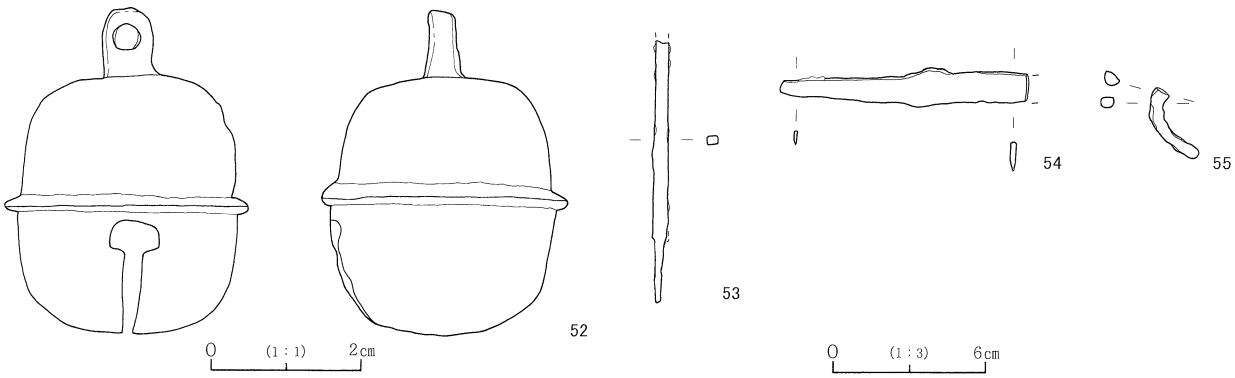
第３表　Ｈ４号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量 口径(長)	法量 底径(幅)	法量 器高(厚)	成形・調整・文様 内面	成形・調整・文様 外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	(11.8)	－	<3.6>	ヨコナデ	体部ヘラケズリ→ナデ、ヘラナデ→口縁ヨコナデ	回転実測	Ⅳ区
2	土師器	坏	(13.2)	－	<3.2>	ヨコナデ	体部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	回転実測	Ⅲ区
3	土師器	坏	(11.0)	－	<3.5>	みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ	口縁ヨコナデ→体部ヘラケズリ	回転実測	Ⅳ区
4	土師器	坏	(17.0)	－	<4.5>	ヨコナデ、放射暗文あり	口縁ヨコナデ→体部ヘラケズリ後ミガキ	回転実測	Ⅲ区
5	土師器	坏	(12.1)	－	<3.4>	ヨコナデ	口縁ヨコナデ→体部ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区、トレンチ４
6	土師器	高坏	(17.0)	－	<3.2>	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測	Ⅲ区
7	土師器	高坏	－	－	<4.6>	坏部ミガキ→黒色処理ミガキ、脚部ナデ→黒色処理	ミガキ	完全実測	Ⅲ区
8	土師器	高坏	－	－	－	坏部ミガキ→黒色処理、脚部ヘラナデ	ミガキ	完全実測	Ⅲ区床直
9	土師器	鉢	(10.0)	－	<6.2>	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナデ→体部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅲ区３層
10	須恵器	坏	10.6	－	3.20	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ区床直
11	須恵器	蓋	(9.7)	(8.3)	3.00	ロクロナデ	ロクロナデ→天上部手持ちヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区、Ⅲ区
12	須恵器	蓋	(10.0)	(4.5)	2.90	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部切り離し後ヘラナデ→外周回転ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区
13	須恵器	高坏	(17.0)	－	<3.4>	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区
14	須恵器	蓋	(12.6)	－	<3.5>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ区
15	須恵器	高坏	－	－	<2.3>	ロクロナデ	ロクロナデ→坏部回転ヘラケズリ	完全実測	Ⅳ区３層
16	須恵器	擂鉢	－	9.2	<5.3>	ロクロナデ	ロクロナデ→底部ヘラナデ	完全実測 内面磨耗	Ⅱ区Ｐ１
17	須恵器	瓶	－	－	<6.7>	ロクロナデ→一部ナデ	ロクロナデ→回転ヘラケズリ、底部ヘラナデ→胴上半２本の沈線で区切り３本１組の櫛描波状文を施す	回転実測	Ⅱ区
18	須恵器	小壺	8.5	4.3	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り	完全実測、内面底部に自然釉付着	Ⅱ区間仕切り内
19	須恵器	小壺	5.8	3.7	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り→底部外周回転ヘラケズリ	完全実測、外面に自然釉付着	Ⅱ区間仕切り内
20	土師器	甕	(21.8)	－	<15.5>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区２層
21	土師器	甕	－	6.8	<3.6>	ヘラナデ	胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ区
22	土師器	甕	(23.3)	－	<14.9>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区・Ⅳ区１層
23	土師器	甕	(22.0)	－	<7.0>	口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ→ミガキ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅱ区
24	土師器	甕	－	(4.2)	<15.3>	ヘラナデ	胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ・Ⅳ区３層、トレンチ４
25	土師器	甕	－	5.0	<6.6>	ヘラナデ	胴部ヘラナデ、底部ヘラナデ	完全実測	Ⅲ区
26	土師器	甕	(13.2)	－	<3.9>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区
27	土師器	甕	(21.2)	－	<6.8>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区２層
28	土師器	壺	－	(9.0)	<7.3>	ミガキ	胴部ミガキ、底部ミガキ	回転実測	Ⅲ区ホリ方・Ｐ５
29	土師器	台付甕	－	(13.0)	<5.0>	ヨコナデ→ヘラナデ	ミガキ	回転実測	Ⅲ区
30	土師器	甕	－	－	－	ヘラナデ	ヘラケズリ	破片実測、墨書	フク土

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
38	台石	輝石安山岩		27.0	18.6	15.00	11660.0	ノミ痕あり。表裏面に擦痕・敲打痕有り。	Ⅲ区床直
39	磨石	輝石安山岩		15.0	12.7	3.70	1050.0	表裏面に擦痕	Ⅱ区Ｐ１
40	磨石・敲石	輝石安山岩		9.8	5.2	3.10	280.0	基部に敲打痕、表面に若干の敲打痕有り。表裏面に擦痕。	Ⅲ区３層
41	敲石	粗粒砂岩		6.5	5.8	2.00	100.0	側面全周に敲打痕有り。	Ⅳ区
42	凹石	石英安山岩		13.4	13.2	8.40	855.0	面取りされている。	Ⅲ区周溝
43	磨石・敲石	石英安山岩		<5.8>	7.1	4.00	180.0	基部側面に敲打痕、表裏面に擦痕。	Ⅳ区
44	磨石・敲石	泥質砂岩		<5.3>	7.7	4.00	180.0	基部側面に敲打痕、表裏面に擦痕。	Ⅱ区
45	磨石・敲石	硬質砂岩		8.4	7.3	2.10	180.0	基部側面に敲打痕、表裏面に擦痕。	Ⅱ区床直
46	磨石・敲石	角閃石		12.6	7.6	4.35	545.0	基部・上部側面に敲打痕、表裏面に擦痕。	Ⅳ区
47	石製品	黒色軽石		5.5	3.9	3.20	35.0	面取りされている。	Ⅳ区
48	敲石	砂岩		12.8	4.8	3.00	275.0	基部・上部側面に敲打痕、左右側面中央に敲打痕。	Ⅲ区
49	石製品	軽石		8.0	5.8	3.95	70.0	面取りされている。	Ⅲ区
50	石製品	軽石		<5.8>	5.8	2.00	25.0	面取りされている。	Ⅲ区
51	紡錘車	滑石		4.5	0.8	1.10	30.0		Ⅳ区３層
52	鈴	鉄		4.3	3.2	0.15	20.1		Ⅱ区２層
53	鉄鏃	鉄		10.9	0.6	0.30			Ⅱ区２層
54	刀子	鉄		9.9	1.2	0.25			Ⅱ区床下
55	角釘	鉄		2.8	0.7	0.50			Ⅲ区フク土

黒色処理される土師器高坏である。９は内面黒色処理される土師器小型の鉢。20～22・24～27は土師器甕、23は内外面よくミガキが施されて壺であろう。30は土師器甕胴部片で、墨書されていると思われるが判然としない。38は台石で側面に鑿痕がみられる。Ｐ２の東脇床面直上から出土した。39は磨石、41は側面全周に敲打痕がある敲石。40・43～46は磨り面を持つ敲石で擦る敲くの両機能を有す。

51は滑石の紡錘車、53は鏃身を欠く角関長頸の鉄鏃、54は刀子でⅡ区の床下から出土した。



第16図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

52は高さ4.3cm幅3.2cmを測る完形の鉄鈴である。Ⅱ区３層の上部から出土した。下方に一文字の穴があけられ体内に土製とみられる丸（珠）が封じ込まれている。古代の鈴は佐久市内で、これまで５点（銅鈴３、鉄鈴１、銅製の馬鈴１）知られている。長土呂遺跡群聖原遺跡平安時代（９世紀後半）のＨ770号住居址から銅鈴、Ｈ203号住居址から銅鈴、Ｈ359号住居址から鉄鈴、奈良時代（８世紀第２四半期）のＨ499号住居址から銅製の馬鈴１点。栗毛坂遺跡群西曽根遺跡Ⅳの溝址から銅鈴が出土した。

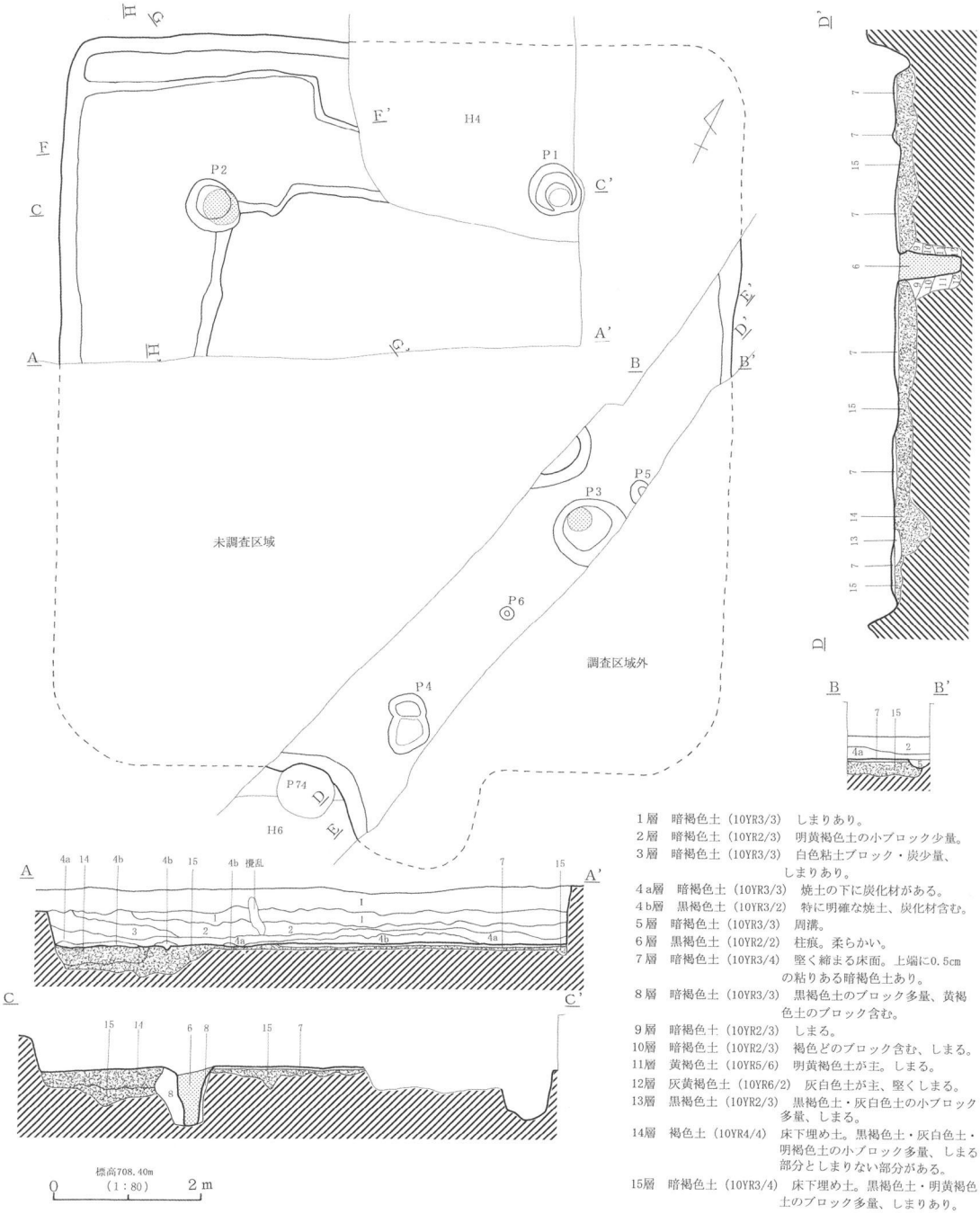
本址はこれらの出土遺物より７世紀後半に位置づけられる。

（５）Ｈ５号住居址

本址は、あ～えー５～７Ｇｒに位置し、Ｈ３・Ｈ４・Ｐ74に切られ、Ｍ２を切っている。

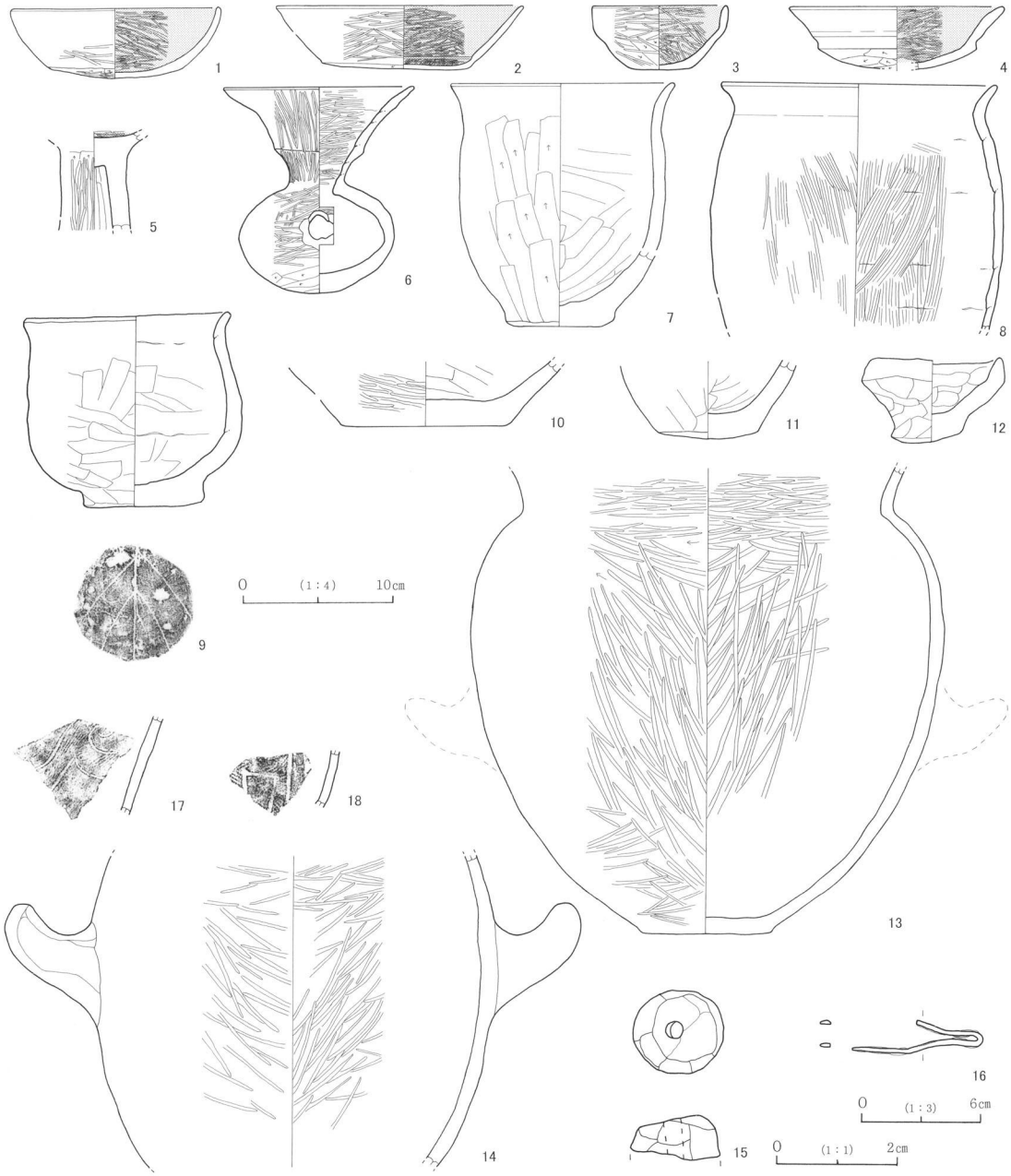
第17図　Ｈ５号住居址実測図

平面規模は北壁検出部3.7m（推定９m）、東壁検出部1.6m（推定８m）、南壁検出部2.0m（推定９m）、西壁検出部4.4mを測る。平面形態は隅丸方形を呈す。壁残高は最深56cmを測り、軸方位はN－25°－Wを測る。



1層　暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり。
2層　暗褐色土（10YR2/3）　明黄褐色土の小ブロック少量。
3層　暗褐色土（10YR3/3）　白色粘土ブロック・炭少量、しまりあり。
4a層　暗褐色土（10YR3/3）　焼土の下に炭化材がある。
4b層　黒褐色土（10YR3/2）　特に明確な焼土、炭化材含む。
5層　暗褐色土（10YR3/3）　周溝。
6層　黒褐色土（10YR2/2）　柱痕。柔らかい。
7層　暗褐色土（10YR3/4）　堅く締まる床面。上端に0.5cmの粘りある暗褐色土あり。
8層　暗褐色土（10YR3/3）　黒褐色土のブロック多量、黄褐色土のブロック含む。
9層　暗褐色土（10YR2/3）　しまる。
10層　暗褐色土（10YR2/3）　褐色どのブロック含む、しまる。
11層　黄褐色土（10YR5/6）　明黄褐色土が主。しまる。
12層　灰黄褐色土（10YR6/2）　灰白色土が主、堅くしまる。
13層　黒褐色土（10YR2/3）　黒褐色土・灰白色土の小ブロック多量、しまる。
14層　褐色土（10YR4/4）　床下埋め土。黒褐色土・灰白色土・明褐色土の小ブロック多量、しまる部分としまりない部分がある。
15層　暗褐色土（10YR3/4）　床下埋め土。黒褐色土・明黄褐色土のブロック多量、しまりあり。

第18図　Ｈ５号住居址実測図



第19図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図

覆土は５層に分層され、１～３層は自然堆積と思われる。４ａ層内の焼土直下に接した炭化材を含む。４ｂ層は住居址中央から西側にみられ、厚い焼土がある。東側は床面上に黒褐色土の堆積が見られず、床面直上に炭化材と焼土があった。Ｐ１の南側は炭化材が小片となり形を留めておらず強く燃えたようである。４ａ・４ｂ層の堆積状況から燃えたのは、住居廃絶後間もない時期かと思われる。

柱穴Ｐ１～Ｐ３は、Ｐ３の位置から台形気味に配置されていたと思える。柱穴間は、東西4.8ｍ南北4.8ｍを測る。径20～30㎝の柱痕がＰ１～Ｐ３から確認され、深さはＰ１が65㎝Ｐ２が80㎝Ｐ３が

第４表　Ｈ５号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	坏	14.0	8.9	4.6	ヘラミガキ、黒色処理	口縁ヘラミガキ、底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区床直
2	土師器	坏	(16.4)	9.8	4.2	ヘラミガキ、黒色処理	口縁ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ区床直
3	土師器	坏	(9.1)	(4.2)	4.2	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラケズリ→ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区床
4	土師器	坏	(14.4)	(10.6)	(4.2)	ヘラミガキ、黒色処理	口縁ヨコナデ、底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区
5	土師器	高坏	－	－	<6.5>	ヘラミガキ、黒色処理、ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	フク土
6	土師器	鍋	12.7	－	13.7	ヘラミガキ ヘラナデ	ヘラケズリ、ハケ目→ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区4ａ層
7	土師器	甕	(15.0)	7.2	16.2		ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ区Ｐ2脇床直
8	土師器	甕	18.5	－	<16.2>	ハケ目	ハケ目	完全実測	Ⅱ区床直
9	土師器	甕	13.8	8.0	12.7	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	Ⅱ区Ｐ２脇床直
10	土師器	甕	－	11.3	<4.3>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	Ⅰ区炭化材直上
11	土師器	甕	－	6.6	<5.2>	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	Ⅲ区４ａ層
12	土師器	手捏ね土器	9.0	4.7	5.5	ナデ	ナデ	完全実測	Ⅱ区床直
13	土師器	把手付壷	－	8.6	<31.0>	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区床直
14	土師器	把手付壷	－	－	<20.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区床直

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
15	臼玉	滑石		(1.40)	(1.50)	(0.70)	(2.30)	下部欠損	Ⅱ区床直
16	毛抜	鉄		(1.80)	(6.50)	(0.50)			Ⅰ区４ａ層

75cmを測る。Ｐ４～Ｐ６は床面下から検出された。

南壁中央部に床面と同じ高さの面の張り出し部が検出された。周溝は北壁・東壁・張り出し部で確認された。

床面下の掘方は主柱穴で構成される方形内は浅く、壁に向けて深く掘り込まれている。

北壁中央には、床面上に粘土ブロックがみられ、Ｈ４号住居址に破壊されたものと思われる。

炭化した住居建築材が、特にＰ２周辺から多量に検出された。Ｐ３から南は燃え方が激しく原形を留めているものが少ない。この付近の炭化材の直上には、明確な焼土がみられた。炭化木材の上下からカヤ状の炭化物も検出された。Ｐ２周辺では、垂木の状態がよくわかる。北面の垂木は棟に斜めに向かい、西面は真直に向かう。北面の垂木の下には、直交する母屋桁がある。垂木材の幅は20cmを測るものがある。４ａ層の炭化材直上の焼土は、屋根に土を被覆していたことも考えられよう。

出土遺物には、土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器、鉄器、石製品、獣骨（馬？）がある。

１～４は内面黒色処理される土師器坏。張り出し部床面直上から出土した１は、浅い半球状の底部から口縁部内弯気味に開く。外面のヘラミガキは粗である。２は北壁中央付近の床面直上出土、平底気味の底部で口縁部と体部の境に外面は凹みが内面には稜を持つ。内外面よくヘラミガキされる。４は所謂有段口縁坏。３は口径が小さくミニチュア品のような形態である。

12は手捏土器で２と接して出土した。５は土師器高坏脚部で内面黒色処理が施される。

６は土師器鍋で張り出し部の４ａ層から出土した。球体（楕円形）の体部から口径部ラッパ状に外反し、短く屈折して口縁部が開く。口径部の中央に段を有す。最大径は口径にあり、体部最大径は体部中央にある。円孔は上方から斜め下方に穿孔されている。孔の大半が欠損している。底部はヘラケズリされ、頸部内面に幅１～1.5cmの粘土帯接合痕みえる。同様な特徴を持つものが岩村田の円正坊遺跡ⅤのＨ１号住居址からも出土している。Ｐ２脇の床面直上から出土した７・９は土師器鉢で、下ぶくれで安定感のある９の底部には木葉痕がみえる。８は土師器甕で２・12と近接して出土した。

13は胴部が丸みを帯び把手を持つ土師器鍋で、内外面ミガキが施される。住居址中央の床面直上から出土した。14はカヤ状炭化材の下から出土した。13とほぼ同形態の土師器鍋。

15の滑石製臼玉は12の手捏土器横から出土した。16の鉄製毛抜はＰ３北側４ａ層から出土した。縄文後期深鉢片は、混入遺物である。

本址は出土遺物より６世紀後半に位置づけられる。

（6）Ｈ６号住居址

本址は、い－７・８Ｇｒに位置し、Ｈ５・Ｐ74を切っている。大半は調査区域外にある。多くの部分に攪乱が及んでいる。

平面規模は北壁検出部2.2ｍ、西壁検出部2.8ｍを測る。壁残高は北西コーナーで最深９㎝を測る。土層観察面では、30㎝の壁高が確認できた。

軸方位はＮ－25°－Ｗを測る。覆土１層は、自然堆積とみられる。柱穴Ｐ１は深さ43㎝を測り、柱穴覆土の３層が柱痕とみられ、径20㎝である。

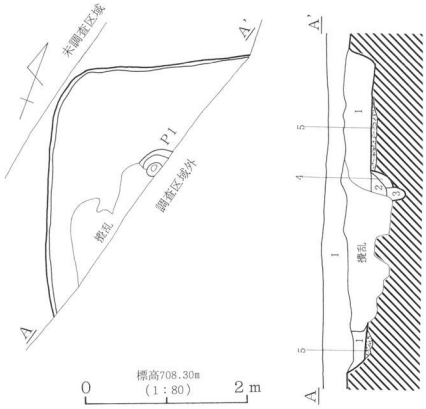
床面は平坦であるが、全体に軟弱であった。

床下の掘り込みは５～10㎝と浅く、褐色土ブロックを含む灰黄褐色土が埋められていた。

カマド等の施設は調査範囲内には見られなかった。

出土遺物は、弥生時代後期・土師器・須恵器片少量で図示可能なものはない。

切り合い関係から古墳時代後期のＨ４号住居址（７世紀後半）やＨ５号住居址（６世紀後半）より新しい。

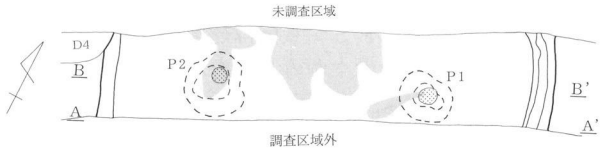


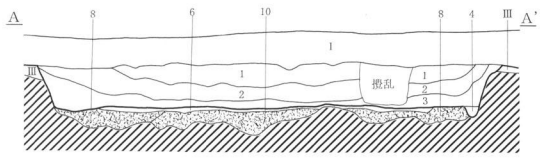
1層　暗褐色土（10YR3/3）　パミス、明黄褐色土、微量含む。
2層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりない 。
3層　暗褐色土（10YR3/3）　しまりない。
4層　黒褐色土（10YR3/2）　にぶい黄橙色土、微量含む。
5層　灰黄褐色土（10YR4/2）　褐色土ブロックを含む。
（床下埋め土）

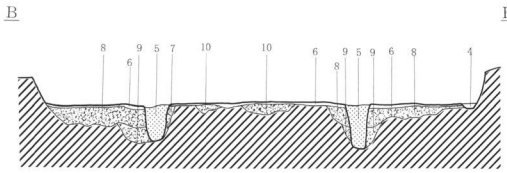
第20図　Ｈ６号住居址実測図

（7）Ｈ７号住居址

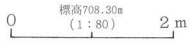
本址は、う・え－９Ｇｒに位置し、Ｄ４に切られている。北側は駐車場予定地の未調査区域に、南側は調査区域外にある。平面規模は東壁検出部1.2ｍ、西壁検出部1.0ｍを測る。壁残高は東壁最深39

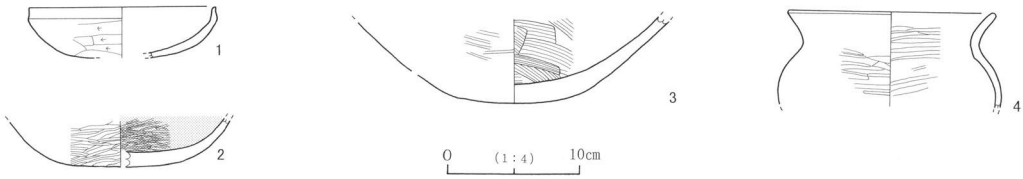






1層　黒褐色土（10YR3/2）　小礫を含む。
2層　暗褐色土（10YR3/3）
　にぶい黄橙色土粒子・ブロックを含む。
3層　黒褐色土（10YR2/3）
　明黄褐色土粒子・ブロック多量含む。炭・灰含む。
4層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
　にぶい黄橙色土多量含む。
5層　黒褐色土（10YR3/2）
　にぶい黄橙色土・微量含む。（柱痕）
6層　暗褐色土（10YR3/3）
　黒褐色土・明黄褐色土ブロック多量含む。（貼床）
7層　黒褐色土（10YR2/3）
8層　灰黄褐色土（10YR4/2）
　黒褐色土・にぶい黄橙色土ブロック多量含む。
9層　黒褐色土（10YR3/2）
　明黄褐色土・暗褐色土のブロック多量含む。
10層　黒褐色土（10YR3/1）
　にぶい黄橙色土・にぶい黄褐色土粒子及び
　ブロックを含む。





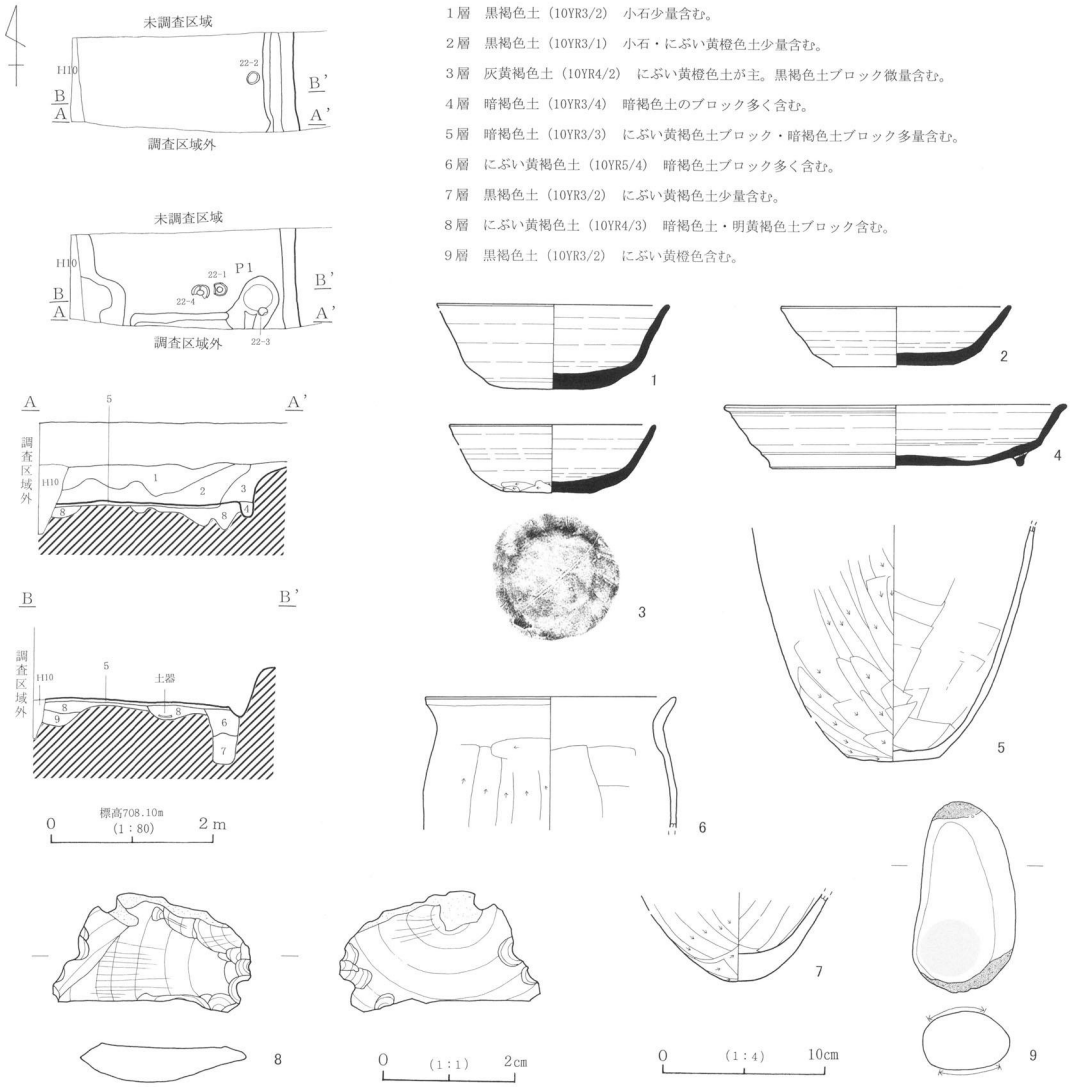
第21図　Ｈ７号住居址及び出土遺物実測図

第５表　Ｈ７号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	坏	(11.4)	－	<3.1>	ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	回転実測	フク土
2	土師器	坏	－	(7.6)	<2.7>	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ	回転実測	フク土
3	土師器	壷	－	7.6	<5.2>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	フク土
4	土師器	鉢	(12.6)	－	<5.8>	ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	回転実測	フク土

cmを測る。土層観察面では、50cmの壁高が確認できた。遺構確認面は、全体層序Ⅱ層内である。軸方位はＮ－23°－Ｗを測る。覆土１・２層は、自然堆積とみられる。３層は地山の明黄褐色土のブロックや粒子を多量に含んでおり人為的な埋土も考えられる。３層下部には炭・灰・焼土粒子が多く見られた。平面的には、Ｐ１からＰ２にかけて炭・灰・焼土が床面上から検出された。

主柱穴Ｐ１・Ｐ２間は２．３ｍ、深さはＰ１が61cmＰ２が54cmを測る。柱痕が確認でき、Ｐ１・Ｐ２とも径20cm円形。幅15～20cm深さ15cm前後の周溝が東壁直下で確認された。平坦な床面は、黒褐色



1層　黒褐色土（10YR3/2）　小石少量含む。
2層　黒褐色土（10YR3/1）　小石・にぶい黄橙色土少量含む。
3層　灰黄褐色土（10YR4/2）　にぶい黄橙色土が主。黒褐色土ブロック微量含む。
4層　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色土のブロック多く含む。
5層　暗褐色土（10YR3/3）　にぶい黄褐色土ブロック・暗褐色土ブロック多量含む。
6層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　暗褐色土ブロック多く含む。
7層　黒褐色土（10YR3/2）　にぶい黄褐色土少量含む。
8層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　暗褐色土・明黄褐色土ブロック含む。
9層　黒褐色土（10YR3/2）　にぶい黄橙色含む。

第22図　Ｈ８号住居址及び出土遺物実測図

土・明黄褐色土が混じる暗褐色土で堅く敲き締められていた。掘方は壁際が20～30cmと深く、にぶい黄橙色土と黒褐色土ブロックを含む灰黄褐色土が埋められる。柱穴上部半分も同一土で埋められていた。

出土遺物には、土師器、弥生土器小片がある。１・２は土師器坏で、１は底部半球状で口縁部弱く内傾する。口縁部と体部の境が明瞭である。２は底部は浅い半球状を呈し、口縁部と体部の境がなくなっている。内面黒色処理される。３は土師器壺であろうか。４は内面ミガキが施される土師器鉢。

本址は少ない出土遺物で時期は明確でないが、７世紀代に位置づけられようか。

（８）Ｈ８号住居址

本址は、お－10Ｇｒに位置し、Ｈ10に西側を切られている。北側は駐車場予定地の未調査区域に、南・西側は調査区域外にある。平面規模は東壁検出部1.2ｍ、壁残高は東壁最深44cmを測る。軸方位はＮ－２°－Ｗを測る。覆土１層は自然堆積、２・３層は地山明黄褐色土のブロックが多量に混じり人為的埋土とみられる。柱穴Ｐ１は床下から検出され、深さは66cmを測る。幅15～20cm深さ15cm前後で断面Ｕ字形の周溝が東壁直下で確認された。平坦な床面は、にぶい黄褐色土が混じった２～６cmの暗褐色土で堅く敲き締められていた。床下の掘り込みは壁際が40cmと深くなり、にぶい黄橙色土と明褐色土ブロックを含む土が埋められていた。

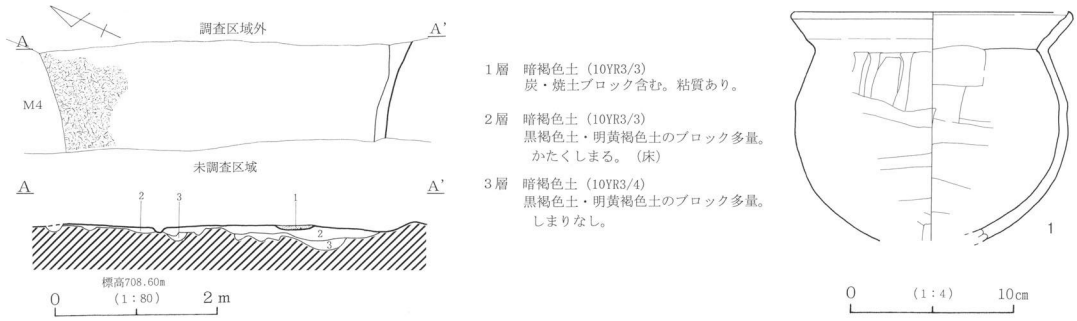
出土遺物には、須恵器、土師器、弥生土器、石器がある。１～４は須恵器坏身で、１・４は床面下のＰ１西脇から並んで出土、３はＰ１内から２はＰ１北の床面直上から出土した。酸化焔焼成、底部回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリされ外周はヘラナデされる。２の底部は、回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ・ヘラナデされる。３の底部は静止糸切り後外周を手持ちヘラケズリされる。ヘラ記号「－」が刻まれる。４は浅い身の有台坏で、底部は回転ヘラケズリ後高台貼付される。５～６はヘラケズリされる土師器甕で、５は床面直上から６・７は床面下から出土した。９は磨り面を持つ敲石で擦る敲くの両機能を有す。

本址は、出土遺物より８世紀前葉に位置づけられる。

第６表　Ｈ８号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	須恵器	坏	(14.3)	7.9	5.2	ロクロナデ→みこみ部ハケナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ、外周ヘラナデ	完全実測	ホリ方
2	須恵器	坏	14.1	8.3	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ、ヘラナデ	完全実測、外面に自然釉付着	Ｐ１北脇床面直上
3	須恵器	坏	(12.7)	5.1	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り後ヘラナデ→底部外周手持ちヘラケズリ	完全実測、底部にヘラ記号あり	Ｐ１内
4	須恵器	皿	21.2	15.7	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付	完全実測	ホリ方
5	土師器	甕	－	5.7	<14.4>	ヘラナデ	胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	完全実測	床面直上
6	土師器	甕	(15.4)	－	<8.4>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	ホリ方
7	土師器	甕	－	－	<5.4>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	ホリ方
No.	器種		素材		残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
8	剥片		黒曜石			3.0	1.9	0.6	3.59		ホリ方
9	磨・敲石		花崗岩			11.7	6.3	3.6			フク土

（９）Ｈ９号住居址



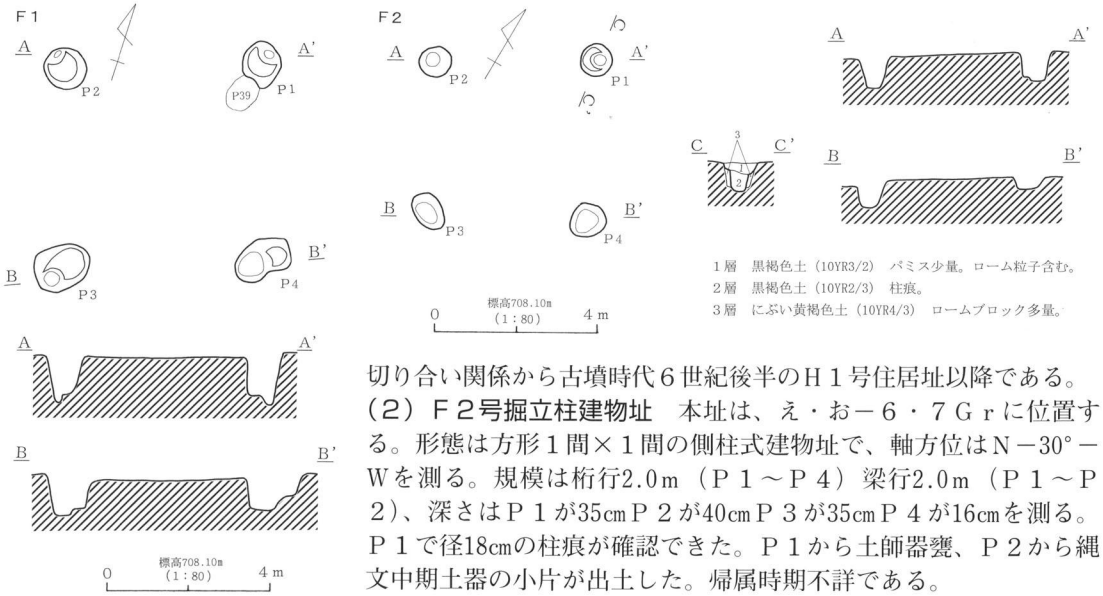
第23図　Ｈ９号住居址及び出土遺物実測図

本址は、あ・いー２・３Ｇｒに位置し、Ｍ４号溝状遺構に全体を切られ、Ｍ３を切っている。西側は駐車場予定地の未調査区域に、東側は調査区域外にある。流路Ｍ４の影響で床北側は喪失し、唯一南壁が検出できた。軸方位はＮ－30°－Ｗを測る。残存している床面は、堅く締まった敲き床である。Ｍ４際には、床面に張り付くように焼土の分布が見られた。出土遺物は、床面下の掘方埋土内から１の土師器小型甕が図示できた。口唇端部がごく短く内傾する。胎土精選されていてヘラケズリがナデの効果となっている。他に小片であるが同様な胎土の内斜口縁を持つ土師器坏片が多数出土している。本址は少ない出土遺物で時期は明確でないが、古墳時代後期初頭に位置づけられようか。

(10) H10号住居址　本址は、お－10Ｇｒに位置しＨ８を切っている。僅かに床面を確認できたのみで詳細は不明。壁高は深く80cmを測る。

２．掘立柱建物址

(１) Ｆ１号掘立柱建物址　本址は、か－４・５Ｇｒに位置し、Ｈ１・Ｐ53を切り、Ｐ39に切られている。形態は方形１間×１間の側柱式建物址である。軸方位はＮ－20°－Ｗを測る。規模は桁行2.8ｍ（Ｐ２～Ｐ３）梁行2.6ｍ（Ｐ１～Ｐ２）を測る。深さはＰ１が66cmＰ２が61cmＰ３が46cmＰ４が46cmを測る。断面はすべてテラスが有り、柱を窺わせる一段深く掘られる部分がある。Ｐ１から土師器坏、Ｐ２から土師器坏甕、Ｐ３から須恵器甕、Ｐ４から土師器甕・須恵器坏の小片が出土した。本址の帰属時期は、



第24図　掘立柱建物址実測図

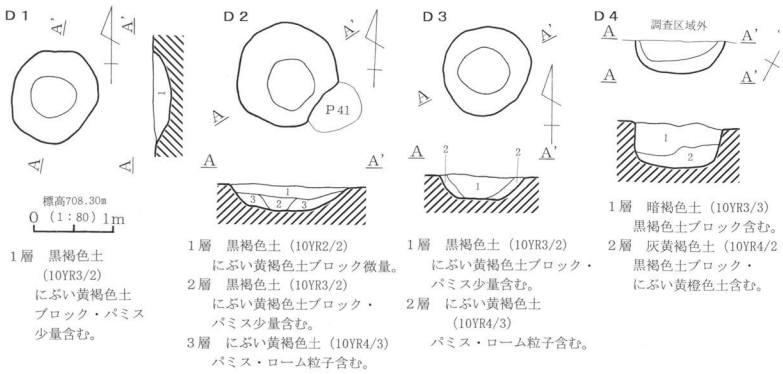
切り合い関係から古墳時代６世紀後半のＨ１号住居址以降である。

(２) Ｆ２号掘立柱建物址　本址は、え・おー６・７Ｇｒに位置する。形態は方形１間×１間の側柱式建物址で、軸方位はＮ－30°－Ｗを測る。規模は桁行2.0ｍ（Ｐ１～Ｐ４）梁行2.0ｍ（Ｐ１～Ｐ２）、深さはＰ１が35cmＰ２が40cmＰ３が35cmＰ４が16cmを測る。Ｐ１で径18cmの柱痕が確認できた。Ｐ１から土師器甕、Ｐ２から縄文中期土器の小片が出土した。帰属時期不詳である。

３．土坑

Ｄ１号土坑　本址は、えー５Ｇｒに位置する。長径1.16ｍ短径1.0ｍ深さ20cm、土師器甕小片が出土。帰属時期不明。

Ｄ２号土坑　本址は、えー５Ｇｒにある。径1.26ｍの円形を呈し、深さ34cm。縄文中期後半深鉢小片が出



第25図　土坑実測図

土。帰属時期不明。**Ｄ３号土坑**　本址は、え－５Ｇｒに位置する。長径1.14ｍ短径1.06ｍ深さ30㎝、出土遺物なし。帰属時期不明。**Ｄ４号土坑**　本址は、え－９Ｇｒに位置する。長径1.1ｍ短径検出部0.4ｍ深さ56㎝、ヘラケズリされる土師器甕片、内面黒色処理が施される土師器坏片、有段口縁坏片が出土している。帰属時期は、Ｈ７号住居址を切ることや出土遺物から古墳時代後半に位置づけられよう。

４．溝状遺構

（１）Ｍ１号溝状遺構　本址は、う～え－３Ｇｒに位置し、東西にのびるているがＨ９・Ｍ４では、確認されない。覆土の２・３層は砂・円礫・シルトが主で東から西への流路であった。溝底面は概ね逆台形であるが、凹凸が激しい。幅0.6～0.74ｍ検出部長6.7ｍ深さ22～35㎝、底面に20～50㎝大の角礫がある。縄文後期土器・弥生後期土器・土師器のそれぞれ摩耗した小片が出土した。獣骨も出土している。Ｍ４より新しいとみられる。**（２）Ｍ２号溝状遺構**　本址は、あ～お－４～６Ｇｒに位置し、東西にのびる。Ｈ１・Ｈ３～Ｈ５・Ｐ41・Ｐ62に切られている。覆土の２～４層は砂・円礫・シルトが主で東から西への流路であった。溝底面は筋状に凹凸が激しく、水勢で深く抉られている箇所もある。幅0.94～1.3ｍ検出部長17.4ｍ深さ23～45㎝。図示したほかに、縄文土器・弥生後期土器・土師器・須恵器のそれぞれ摩耗した小片が出土した。１は内面黒色処理が施される土師器高坏、２・３は磨石。帰属時期はＨ１・Ｈ５との重複関係から、６世紀後半以前である。

（３）Ｍ３号溝状遺構　本址は、あ・い－３Ｇｒに位置し、東西にのびる。Ｈ４付近では確認されなかった。Ｍ４・Ｐ75に切られている。他の溝とは異なり流水の痕跡はない。断面は逆台形を呈する。幅1.0ｍ検出部長1.4ｍ深さ41㎝。図示した他に縄文後期土器・弥生後期土器・土師器・須恵器小片が出土した。

４は弥生時代後期の甕である。帰属時期は不明。**（４）Ｍ４号溝状遺構**　本址は、い－１・２Ｇｒに位置し、東西にのびる。隣接する西近津Ⅵの調査区でも確認されている。Ｈ９・Ｍ３を切る。覆土の２・４～６層は砂・円礫・シルトが主で東から西への流路であった。溝底面は凹凸が激しく、水勢で深く抉られている箇所もある。幅8.2ｍ検出部長1.5ｍ深さはＨ９と重複する部分では20～40㎝、北側は1.0ｍで深くなる。図示したほかに、底部糸切り痕の土師器坏・内面黒色処理される坏・須恵器のそれぞれやや摩耗した小片が出土した。５は内面黒色処理が施される土師器高坏、７は土師器内斜口縁の坏、８～10は須恵器蓋坏。11の硬質砂岩の石製品は表裏面・側面ともよく磨かれていて光沢を帯びる。擦痕も多く見られる。12は鉄鏃、13は刀子、14は不明銅製品。帰属時期は不明確であるが、弥生時代後期～平安時代の遺物が出土している。

第７表　溝状遺構及び試掘トレンチ出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量 口径(長)	法量 底径(幅)	法量 器高(厚)	成形・調整・文様 内面	成形・調整・文様 外面	備考	出土位置
1	土師器	高坏	(12.0)	9.2	8.2	坏部ヘラミガキ→黒色処理、脚部ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	Ｍ2
4	弥生	甕	－	7.6	<6.6>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	Ｍ3
5	土師器	高坏	－	(11.2)	<9.3>	坏部ヘラミガキ→黒色処理、脚部ナデ	ヘラミガキ	完全実測	Ｍ4
6	土師器	甕	－	9.4	<2.4>	ヘラミガキ	底部剥落が激しい	完全実測	Ｍ4
7	土師器	坏	(12.6)	－	<5.7>	ナデ	ナデ	回転実測	Ｍ4
8	須恵器	蓋	－	(9.6)	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	Ｍ4
9	須恵器	蓋	－	(9.8)	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	回転実測	Ｍ4
10	須恵器	蓋	－	9.6	<1.9>	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付痕あり	完全実測	Ｈ1付近遺構確認面

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
2	編物石	硬質砂岩		－	8.8	5.5	295.30		Ｍ2
3	編物石	輝石安山岩		13.6	6.8	4.3	605.80		Ｍ2
11	石製品	硬質砂岩		4.3	4.1	2.4	98.90		トレンチ2
12	鉄鏃	鉄		8.3	0.9	0.3			Ｍ4
13	刀子	鉄		8.9	1.3	0.3			Ｍ4
14	不明	銅		2.3	1.1	0.3			トレンチ3

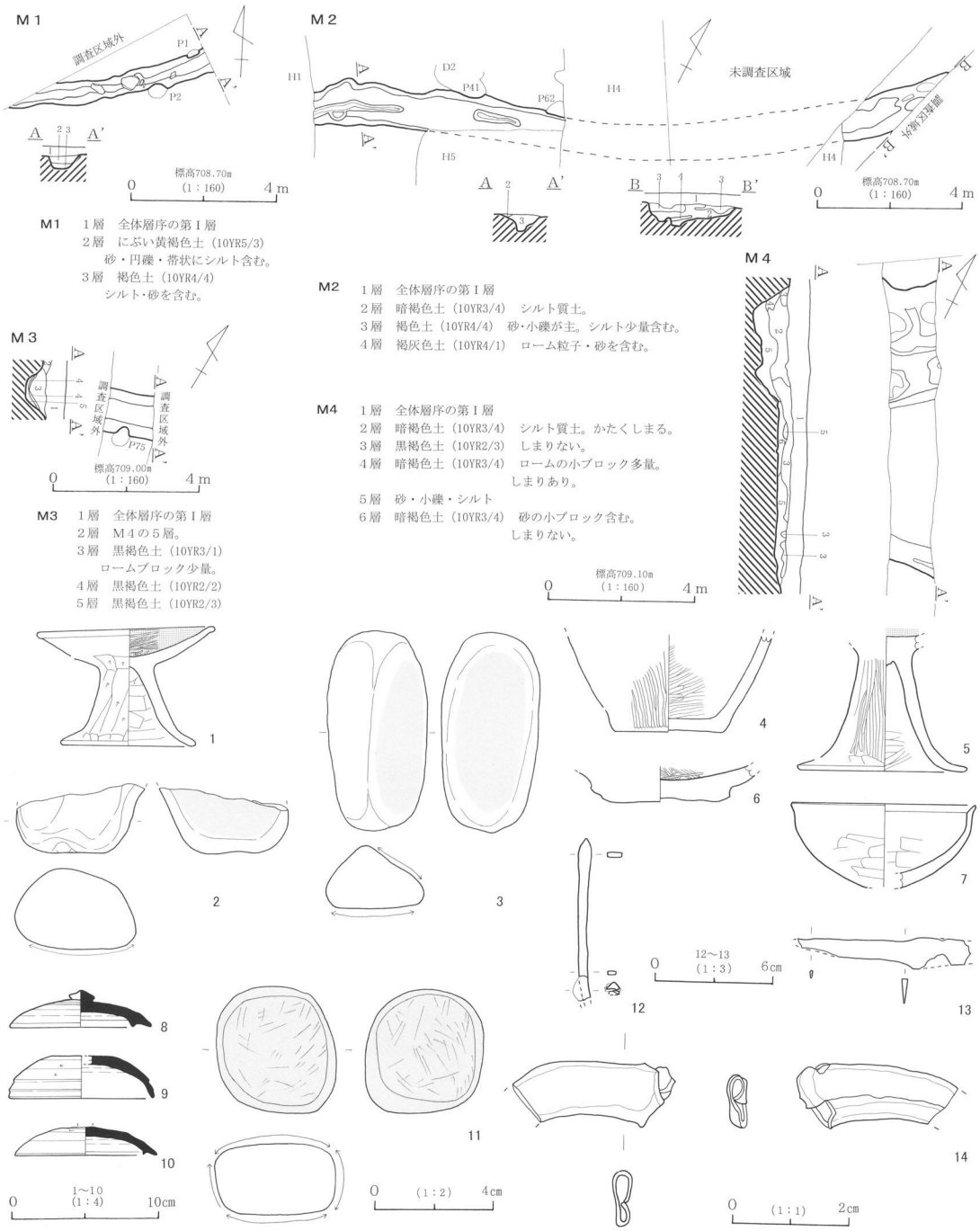
５．ピット群

単独のピットとして69個が検出された。Ｆ１号掘立柱建物址の周辺に特に集中していた。Ｐ７・Ｐ８・Ｐ12・Ｐ16・Ｐ28・Ｐ39・Ｐ40・Ｐ41から20～30㎝の柱痕が確認された。第８表に示したように多くのピットから遺物が出土した。縄文時代中期・後期、弥生時代後期、土師器・須恵器の小片である。

６．まとめ

竪穴住居址は、13軒検出された。３軒は試掘調査で所在だけ確認した。調査の及んだ10軒も未調査区域や調査区外の部分が多い。６世紀後半が２軒（Ｈ１・Ｈ５）、６世紀代が１軒（Ｈ９）、７世紀後半

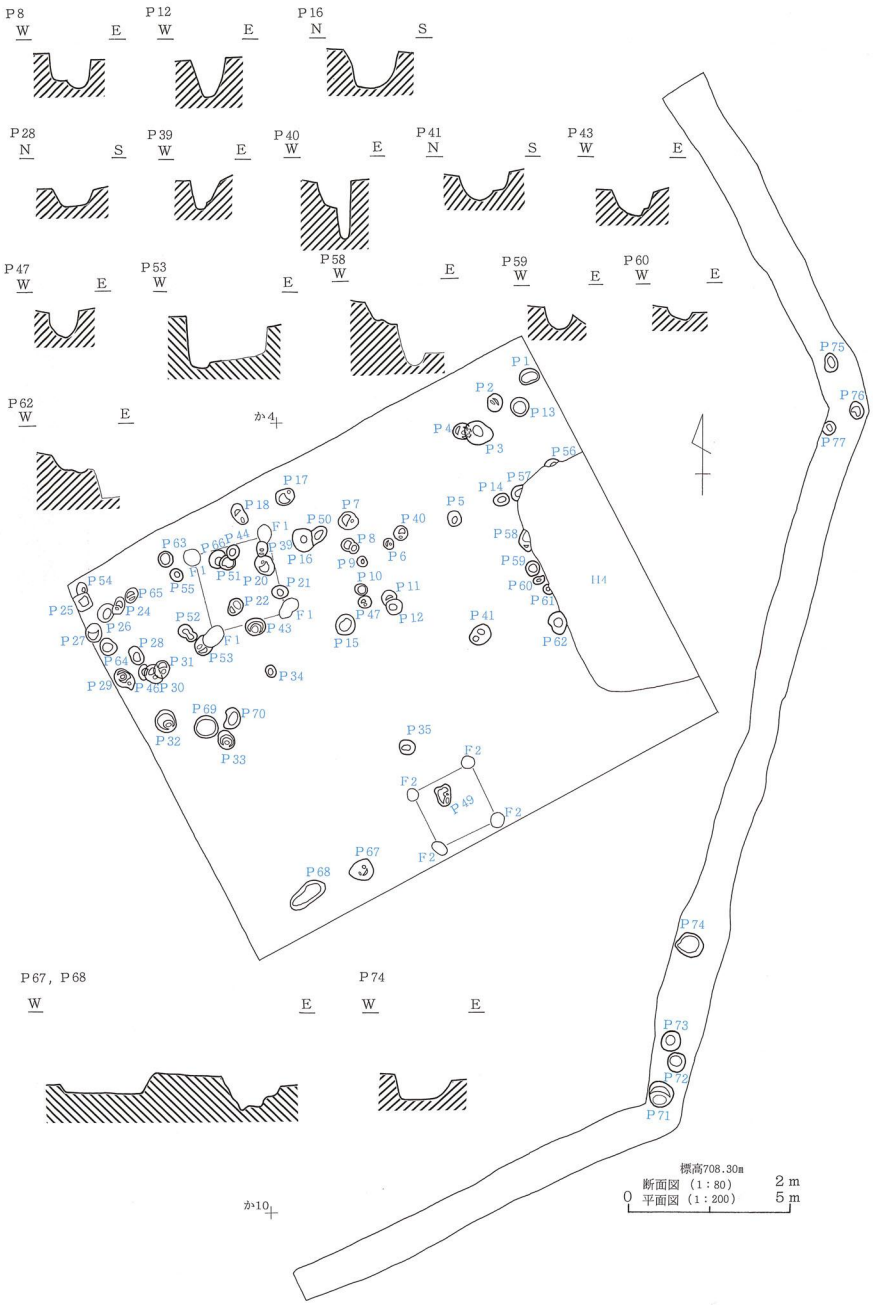
が１軒（Ｈ４）、８世紀代が２軒（Ｈ７・Ｈ８）、11世紀代が１軒（Ｈ２）、不明が３軒（Ｈ３・Ｈ６・Ｈ10）であった。同様な時代の竪穴住居址は、長野県埋蔵文化財センターが調査中の西近津遺跡群や佐久市教育委員会が調査中の西近津遺跡Ⅲ～Ⅴで300軒ほど検出されている。西近津遺跡群の西側に



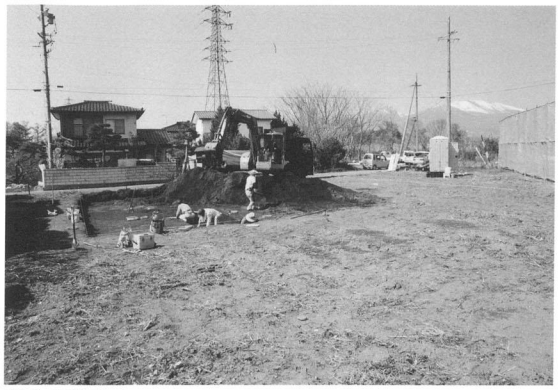
第26図　溝状遺構実測図及び溝状遺構・試掘トレンチ出土遺物実測図

多量に遺物がみられる縄文時代の遺構や南側で検出された弥生時代の遺構は確認されず、少量の土器片が出土した。注目される遺物はＨ４号住居址の鉄鈴とＨ１号住居址の耳鐶である。以下市内の出土例を列記しておく。鉄鈴・銅鈴はＨ４に記したように５点（銅鈴３、鉄鈴１、銅製の馬鈴１）が出土している。住居址から４点、溝から１点である。本遺跡例で６点となる。耳鐶は古墳以外で10遺跡19点（金滅金が17点、銀滅金が中原遺跡群ＳＢ43住・中西の久保遺構外の２点）がある。本遺跡例で11遺跡21点となる。

中原遺跡群４点（７Ｃ住居址３軒、不明）、芝宮遺跡群５点（７Ｃ住居址２軒、９Ｃ１軒、溝２条）、長土呂遺跡群２点（７Ｃ住居址２軒）、宮ノ反Ａ１点（７Ｃ住居址）、長野原１点（６Ｃ住居址）、川原端１点（７Ｃ住居址）、直路Ⅱ１点（溝）、中西の久保Ⅱ２点（遺構外）、東五里田１点（８Ｃ住居址）、下聖端１点（８Ｃ住居址）。



第27図　ピット群実測図


表土の除去

Ｈ１号住居址全景

Ｈ１号住居址掘方全景

Ｈ１号住居址カマド全景

Ｈ１号住居址カマド袖部断ち割り状況

Ｈ１号住居址床下鉄族出土状況

Ｈ２号住居址全景

Ｈ２号住居址掘方全景

写真図版2

H３号住居址全景

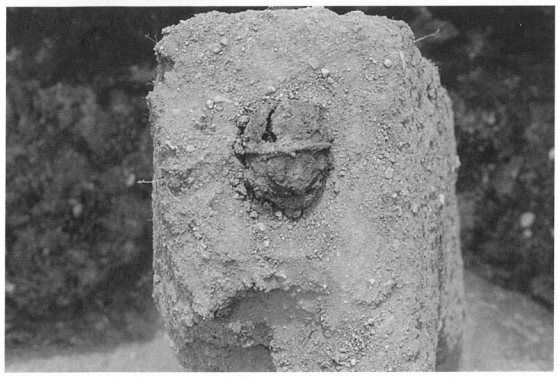
H４号住居址遺物出土状態

H４号住居址全景

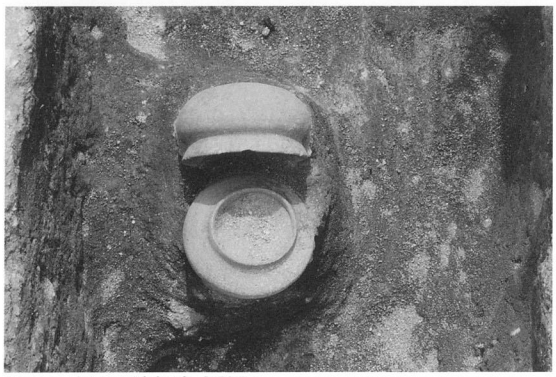
H４号住居址掘方全景

H４号住居址南東部検出状況

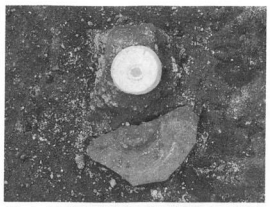
H４号住居址遺物出土状況



H４号住居址鉄鈴出土状況



H４号住居址遺物出土状況


H４号住居址紡錘車出土状況

H４号住居址鉄族出土状況

H４号住居址鉄族出土状況

H４号住居址獣骨出土状況

H５号住居址炭化材出土状態

H５号住居址炭化材出土状態

H５号住居址炭化材除去後

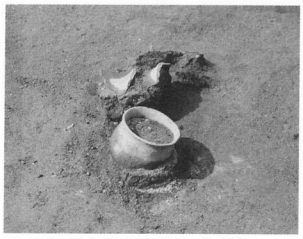
H５号住居址掘方

H５号住居址南東部

H５号住居址南東部掘方

H５号住居址遺物出土状況

H５号住居址遺物出土状況

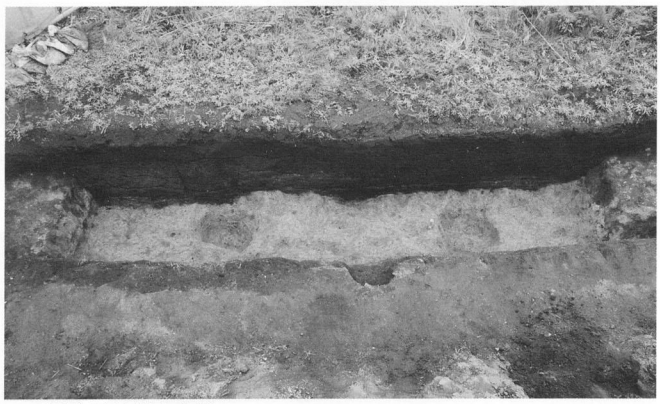

H５号住居址遺物出土状況

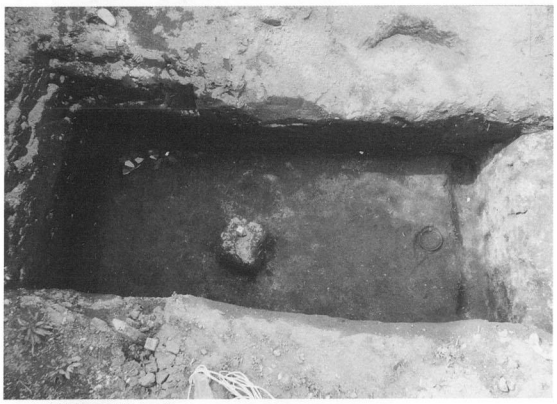
H５号住居址遺物出土状況

Ｈ６号住居址全景

Ｈ７号住居址全景

Ｈ７号住居址炭化材出土状況


Ｈ７号住居址掘方全景


Ｈ８号住居址全景

Ｈ８号住居址床面下の遺物出土状況

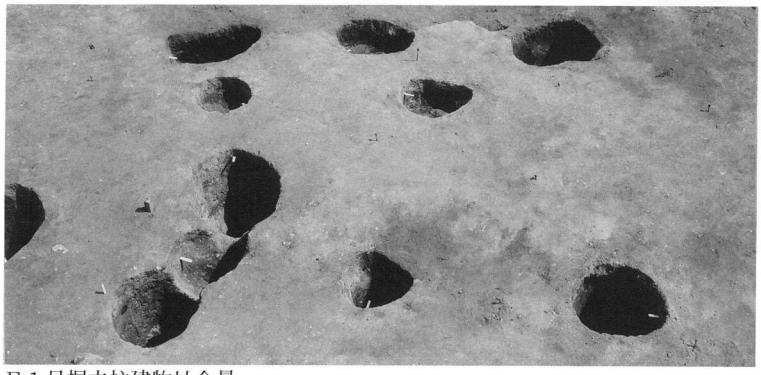
Ｈ８号住居址遺物出土状況

Ｈ８号住居址遺物出土状況

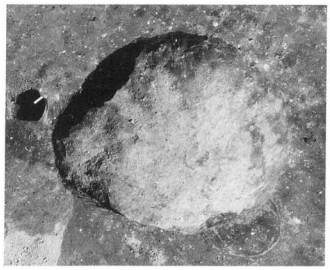
Ｈ８号住居址床面下の遺物出土状況

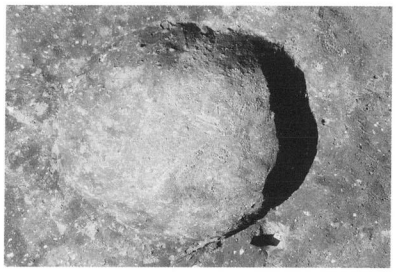
H９号住居址全景

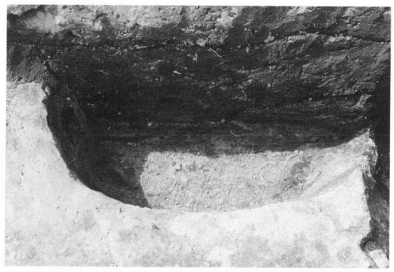
H９号住居址掘方全景


F１号掘立柱建物址全景

D１号土坑全景

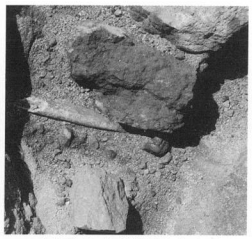

D２号土坑全景


D３号土坑全景


D４号土坑全景

M１号溝状遺構全景

M２号溝状遺構全景

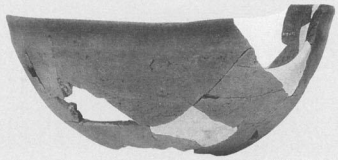

M１号溝状遺構獣骨出土状況

M３号溝状遺構全景

M４号溝状遺構全景

6-2（H1）

6-10（H1）



6-12（H1）

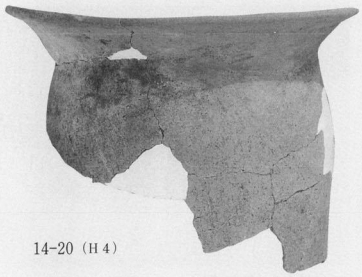
11-1（H2）

7-22（H1）

8-23（H1）

14-18（H4）

14-19（H4）



14-20（H4）

14-1（H4）

14-16（H4）

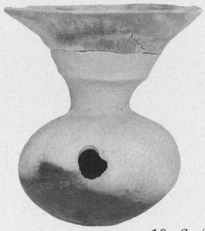
19-1（H5）

19-2（H5）

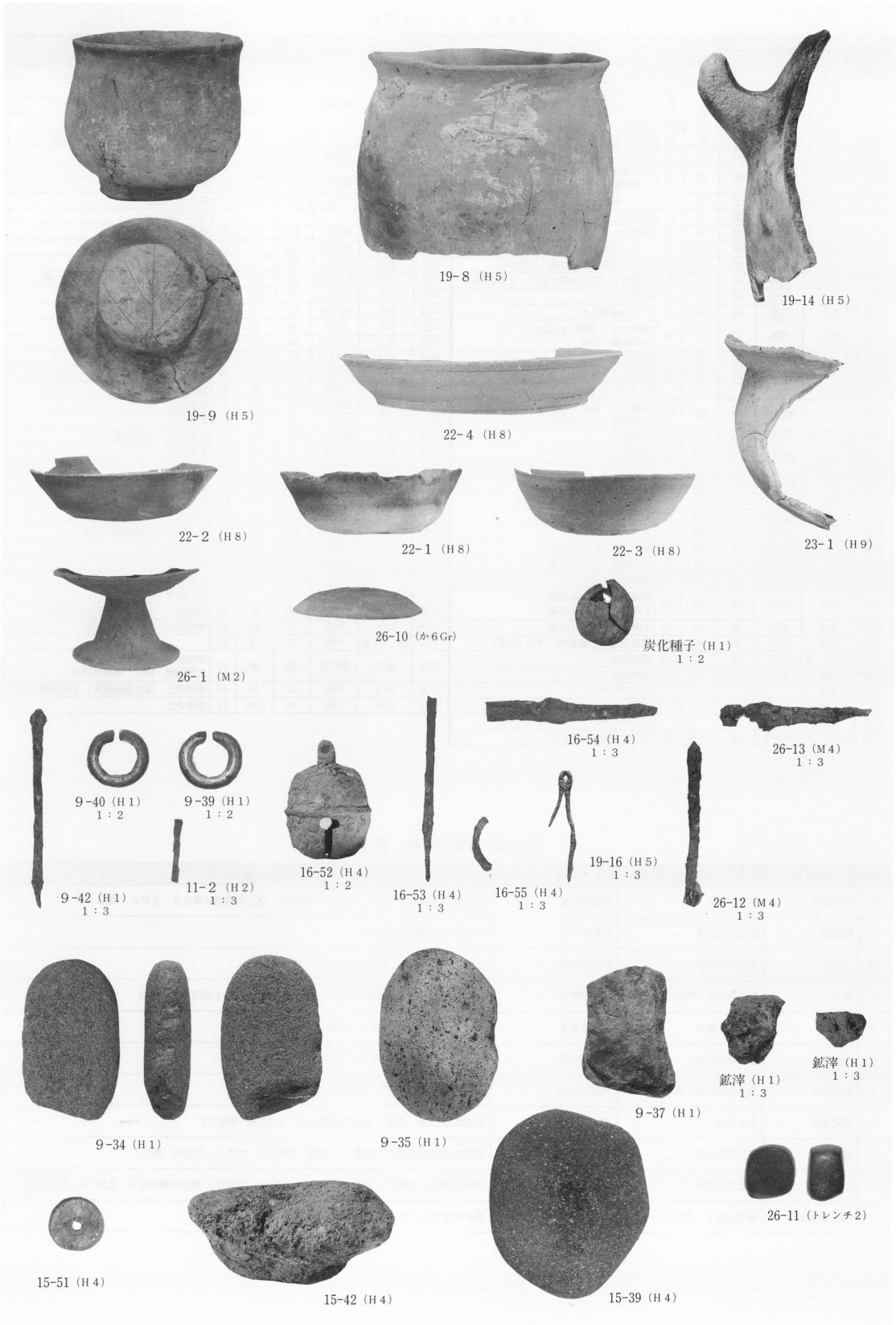
19-12（H5）

19-13（H5）

19-7（H5）



19-6（H5）


19-8（H5）
19-14（H5）
19-9（H5）
22-4（H8）
22-2（H8）
22-1（H8）
22-3（H8）
23-1（H9）
26-1（M2）
26-10（か6Gr）
炭化種子（H1）
1：2
16-54（H4）
1：3
26-13（M4）
1：3
9-40（H1）
1：2
9-39（H1）
1：2
16-52（H4）
1：2
16-53（H4）
1：3
16-55（H4）
1：3
19-16（H5）
1：3
9-42（H1）
1：3
11-2（H2）
1：3
26-12（M4）
1：3
9-34（H1）
9-35（H1）
9-37（H1）
鉱滓（H1）
1：3
鉱滓（H1）
1：3
26-11（トレンチ2）
15-51（H4）
15-42（H4）
15-39（H4）

第８表　ピット計測表

遺構名	検出位置	平面形	規模（cm）			備　考
			長軸長	短軸長	深さ	
P１	え３	楕円形	66	46	28	褐色土、土師器甕片（古墳）
P２	え３	円形	54	50	41	にぶい黄褐色土、土師器甕片（古墳）
P３	え４	楕円形	86	66	22	にぶい黄褐色土、土師器甕片
P４	え４	楕円形	62	46	38	底面堅い
P５	え４	円形	48	42	35	黒褐色土
P６	お４	円形	32	32	19	黒褐色土
P７	お４	楕円形	64	48	42	にぶい黄褐色土、柱痕（φ20ｃｍ）、土師器甕片（古墳）
P８	お-４・５	８の字形	56	36	41	にぶい黄褐色土、柱痕（φ24cm）
P９	お５	円形	32	30	25	暗褐色土
P10	お５	円形	36	36	50	暗褐色土
P11	お５	円形	48	(30)	33	にぶい黄褐色土、縄文土器片、土師器甕片
P12	お５	円形	48	48	51	にぶい黄褐色土、柱痕（φ20cm）
P13	え３	円形	60	58	22	暗褐色土、弥生後期土器片、土師器甕片
P14	え４	円形	46	34	35	黒褐色土
P15	お５	円形	64	64	23	にぶい黄褐色土
P16	お４	円形	70	60	46	褐灰色土、柱痕（φ20cm）、土師器甕・坏片
P17	お・か-４	楕円形	60	44	28	暗褐色土
P18	か４	楕円形	66	36	42	暗褐色土
P19	欠番					F1のP1へ
P20	か５	楕円形	68	52	59	黒褐色土、縄文土器片、弥生後期坏片、土師器甕・坏片（古墳）
P21	お・か-５	円形	46	40	24	暗褐色土
P22	か５	楕円形	50	40	30	暗褐色土
P23	欠番					F1のP2へ
P24	き５	楕円形	56	36	35	土師器甕片
P25	き５	方形	50	46	37	暗褐色土、柱痕、土師器甕片
P26	き５	楕円形	56	44	25	黒褐色土、土師器甕片
P27	き５	楕円形	56	46	27	褐色土
P28	か・き-５	楕円形	52	36	23	褐色土 柱痕（φ20cm）
P29	き-５・６	８の字形	72	44	44	土師器甕・坏片（古墳）
P30	か５	（円形）	64	(30)	49	黒褐色、土師器坏片
P31	か５	円形	52	46	40	黒褐色土、弥生後期壷片、土師器甕・坏片（古墳）
P32	か６	円形	68	58	43	土師器甕・坏片（古墳）
P33	か６	円形	58	46	56	黒褐色土、土師器甕・坏片（古墳）
P34	お・か-５	円形	36	32	19	黒褐色土
P35	え・お-５	円形	56	44	20	黒褐色土
P36	欠番					F2のP3へ
P37	欠番					F2のP4へ
P38	欠番					F2のP1へ
P39	か-４・５	楕円形	48	34	38	褐色土 柱痕（φ20cm）
P40	お４	円形	46	40	74	にぶい褐色土、柱痕（φ20cm）、土師器甕片
P41	え５	楕円形	72	52	39	灰黄褐色土、柱痕（φ30cm）
P42	欠番					F1のP4へ
P43	か５	円形	60	52	29	にぶい黄褐色土、柱痕、土師器甕片
P44	か-４・５	楕円形	44	32	42	黒褐色土、土師器甕片
P45	欠番					F1のP3へ
P46	き５	楕円形	50	(16)	34	黒褐色土
P47	お５	円形	42	36	32	褐色土、柱痕
P48	欠番					F2のP2へ
P49	え６	楕円形	60	36	19	褐色土
P50	お４	楕円形	(54)	36	27	暗褐色土
P51	か５	円形	52	46	28	黒褐色土、土師器甕・坏片
P52	か５	８の字形	62	36	22	暗褐色土、土師器甕・高坏片（古墳）
P53	か５	（円形）	62	(36)	63	
P54	き５	楕円形	44	28	-	黒褐色土　底面かたい
P55	か５	円形	36	36	25	暗褐色土　しまりあり
P56	う４	（円形）	44	(22)	33	暗褐色土
P57	え４	（円形）	54	(30)	32	暗褐色土、土師器甕片（古墳）
P58	え４	（円形）	72	(40)	29	暗褐色土、土師器甕・坏片（古墳）
P59	う・え-５	円形	48	44	32	暗褐色土
P60	う５	楕円形	36	20	15	黒褐色土
P61	う５	（円形）	32	(18)	16	暗褐色土
P62	う５	楕円形	66	48	28	暗褐色土、土師器甕・坏片
P63	か５	円形	48	44	14	黒褐色土
P64	き５	円形	52	50	17	暗褐色土
P65	き５	楕円形	44	32	18	暗褐色土
P66	か５	円形	56	(34)	20	黒褐色土
P67	お７	円形	80	64	42	暗褐色土
P68	お７	楕円形	120	52	24	暗褐色土、土師器甕・坏片
P69	か６	円形	(70)	(66)	65	土師器甕・坏片
P70	か６	楕円形	(70)	(44)	65	暗褐色土
P71	い・う-９	円形	72	68	43	暗褐色土、須恵器坏片、土師器甕・坏片（古墳）
P72	い８	円形	58	56	29	暗褐色土、土師器甕・坏片（古墳）
P73	い８	円形	62	58	47	暗褐色土、土師器甕・坏片
P74	い-７・８	円形	72	72	31	
P75	あ３	楕円形	58	38	31	暗褐色土、縄文土器片、土師器甕・坏片、須恵器坏片
P76	あ３	円形	47	44	46	暗褐色土、弥生後期壷片、土師器甕・坏片
P77	あ４	円形	44	(36)	23	暗褐色土

第９表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査年度	検出遺構等
1	西近津Ⅵ	長土呂森下	平成20年度	住居址10(古墳５、奈良１、平安１、不明３)、掘立柱建物址溝址２、土坑４、溝址４他
2	西近津	長土呂西近津	昭和46年度	住居址４（古墳３）溝址８
3	下長畝	長土呂下永畝	昭和60年度	住居址４（弥生２、不明２）、土坑７、溝址３
4	森下	長土呂森下・若宮・西近津他	昭和63年度	住居址20(弥生４、古墳５、奈良１、平安６、不明３)、土坑29、溝址６他
5	三貫畑	長土呂三貫畑	平成２年度	住居址４（弥生１、古墳１、奈良１、平安１）
6	西近津Ⅱ	長土呂西近津	平成15年度	住居址６（古墳５、奈良１）、竪穴状１、土坑１
7	西近津Ⅲ	長土呂西近津・森下	平成18年度	住居址29(古墳～平安)、土坑20、溝址２
8	西近津Ⅳ	長土呂森下	平成19・20年度	住居址53(古墳～平安)、掘立柱建物址３、土坑58、溝址13
9	西近津Ⅴ	長土呂西近津	平成19年度	住居址19(弥生後期２、古墳11、奈良～平安６)、古墳１、土坑10、溝址７
10	西近津Ⅶ	長土呂三貫畑	平成20年度	住居址26(弥生後期７、古墳２、奈良３、平安９、不明５)、掘立柱建物址２、土坑12、溝址２他
11	西近津遺跡群	長土呂森下・西近津	平成18～20年度	長野県埋文センター調査中

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第161集

西近津遺跡群
西近津遺跡Ⅵ

2009年3月

編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006　長野県佐久市志賀5953
TEL　0267-68-7321

印　刷　所　株式会社　佐久印刷所

報告書抄録

書名	西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ
ふりがな	にしちかつ　にしちかつ
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第161集
編著者名	林　幸彦　　佐々木　宗昭
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2009.3.31
郵便番号	385－0006
電話番号	0267－68－7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	西近津遺跡群西近津遺跡Ⅵ（ＮＴⅥ）
遺跡所在地	佐久市長土呂字森下1803-3
遺跡番号	29
経度	138°-27′-22.″（世界測地系）
緯度	36°-17′-04.″（世界測地系）
調査期間	2008.4.22～2008.6.6　（現場） 2008.6.9～2009.3.27　（整理）
調査面積	285㎡
調査原因	長屋建住宅建設
種別	集落址
主な時代	古墳時代～平安時代
遺跡概要	遺構　竪穴住居址10軒（古墳～平安）　土坑４基　溝状遺構４条　ピット69個 遺物　縄文土器　弥生土器　土師器　須恵器　鉄器　鉄製品（鉄鈴）石器 石製品　石製模造品（臼玉）青銅製品（耳環）白磁　獣骨
特記事項	古墳時代後期の焼失住居址や鉄鈴の出土は、貴重な資料となった。